甲斐山岳

2025年3月　第16号

公益社団法人

日本山岳会山梨支部

甲斐山岳

2025年3月　第16号

公益社団法人
日本山岳会山梨支部

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・古屋　寿隆　1

山行報告

雪山ステップアップ講習（３）・清水　真理　2

三方分山・パノラマ台・・・・渡辺　和美　3

蜂城山・神領山・大久保山・・臼田　昌美　4

茅ヶ岳と第43回深田祭・・・・磯野　澄也　5

霧訪山・・・・・・・・・・・平松　清子　7

田部祭と西沢渓谷・・・・・・矢﨑　茂男　7

富士山5合目須走登山道周辺・鶴田　淳　9

蝶ヶ岳・・・・・・・・・・・窪田　光一　10

クライミング講習（１）・・・近藤美奈子　11

クライミング講習（２）・・・高橋みゆき　12

登山・ハイキングのためのロープワークと

　レスキュー技術講習・・・・手崎喜美子　13

笠無・・・・・・・・・・・・矢﨑　茂男　14

三ツ峠・・・・・・・・・・・磯野　澄也　16

笠ヶ岳・・・・・・・・・・・高橋みゆき　17

乗鞍岳・・・・・・・・・・・村田　幸子　18

焼岳・・・・・・・・・・・・磯野　澄也　19

男山・天狗山・・・・・・・・小宮山千彰　20

富士山奥庭・・・・・・・・・遠藤　辰也　21

鳳凰山・・・・・・・・・・・湊　ちせ　22

奈良倉山・・・・・・・・・・平松　清子　23

御座山・・・・・・・・・・・橘　希代子　24

源氏山・・・・・・・・・・・臼田　昌美　26

丹波天平・・・・・・・・・・手崎喜美子　27

興因寺山・・・・・・・・・・角田　元　28

浜石岳・・・・・・・・・・・岩間　明子　29

宝登山・・・・・・・・・・・平松　清子　30

公益・共益事業

第10回やまなし登山基礎講座・・・矢﨑　茂男　31

第7回田部祭・・・・・・・・矢﨑　茂男　34

第5回子どもと登山・・・・・北原　孝浩　36

第65回木暮祭・・・・・・・・石澤　貴子　37

第11回中部ブロック4支部交流会・大澤　純二　38

報告・エッセイ

日本高山植物保護協会設立35周年

　記念シンポジウムを終えて・・中村　光吉　40

貝伏山里山水源の森復元事業・・大澤　純二　41

特別な第65回木暮祭・・・・・北原　孝浩　42

藤田さんの情熱と勇気・・・・矢﨑　茂男　46

新会員紹介　向山　紀子さん、小池雄一郎さん

　　　　　　猪俣健之介さん、村田　幸子さん　48

事務局報告・・・・・・・・・・・・・・50

会員名簿・・・・・・・・・・・・・・・54

巻頭言

支部長　古屋　寿隆

昨年４月の総会で支部長に選任され、５月１日正式に就任して約１年が経過しました。この間、第43回深田祭、第７回田部祭を４月に、第65回木暮祭を前夜祭も含めて10月に一泊二日で実施しました。これらの山岳祭は全国に13あり、日本山岳会創立１２０周年事業の一環として位置づけられております。これからも先人の功績を讃え偲びながら山岳文化と歴史や伝統を後世に引き継いでいくことが必要です。

８月山の日記念として第５回子どもと登山を飯盛山で実施し、９月から10月にかけては、やまなし登山基礎講座を７回開催しました。コロナ感染拡大により休講が一度はありましたが、10回目を実施し、一区切りつけることができました。また、中部ブロック４支部交流会を山梨支部の担当により八ヶ岳山麓清泉寮で11月に開催しました。公募山行、支部山行も順調に実施いたしました。また支部員も順調に増えており、総勢80名の支部になっております。

こうした中で、本部では初めて女性会長が誕生しております。本年令和７年10月14日に創立１２０周年を迎えるにあたって、橋本しをり会長は、新しい時代にふさわしい日本山岳会の在り方について理念を公表しております。すなわち、会の指針としてのスローガンは「みんなの日本山岳会」であり、具体的なイメージとしてのビジョンは「すべての人に山の楽しさを」です。

このスローガンには、当会が「山岳を愛し、探求し、社会に貢献する志を持ち、ボランティア精神に富んだ会員が集う組織」であり、「老若男女、登山の初心者から世界の高峰登山隊のメンバーまで、そして若者から中高年、女性を含む幅広い層が参加する、多様性に富んだ会」となっていること、そして「一人ひとりが自分らしく活躍し、互いに支え合い、助け合いながら成長できる組織でありたいという願い」が込められています。

山梨支部においても、ここ数年新しい会員が大勢入会し、それぞれ多様な山岳活動を多角的に行っています。会員の個性を尊重し、伸長できる施策を今後実施するとともに、充実したクラブライフを生涯にわたって楽しく続けられる会にしていきたいと考えております。

山行報告

雪山ステップアップ講習（3）

清水　真理

山行日：令和6年3月16日（土）・17日（日）
地　図：2万5千図「八ヶ岳西部」
行　程：16日　茅野駅東口―送迎にて桜平―夏沢鉱泉―根石山荘―根石岳・東天狗岳ピストン―根石山荘（泊）
17日　根石山荘―夏沢峠―硫黄岳―夏沢峠―オーレン小屋―夏沢鉱泉―茅野駅
参加者：小宮山千彰、石澤貴子、杉山建一、福田千絵
堤幸司、平田美穂子、清水真理

今まで雪山は初心者向けのコースしか経験がなく、東天狗岳と硫黄岳は私にとって言葉通りステップアップの山だった。去年の同じ講習会では、風が強くて大変だったと聞いていたので、しっかりと防寒対策を行い挑んだ初日は、まさかの晴天で風はどこにもない。夏沢峠へ向かう登りは暑すぎて、3月の雪山なのに腕まくりをしても汗が出てくるほどだった。

根石山荘についてから、東天狗岳へ。去年は爆風で登ることが出来なかったと聞いていたが、あっさり登頂。空には雲一つなく東天狗岳からの景色は絶景で、翌日もこの天気だったら硫黄岳にも登頂できるぞとワクワクする。

しかし、絶好調だったのもここまで。夕方からは徐々に風が強くなり、根石山荘に吹きつける強風が嵐の様な音を立てて襲い掛かる。トタン屋根を叩く風は朝まで収まることがなく、寝たのか寝てないのか分からないまま起きた。

山荘を発ってからも風は一向に弱まる気配がなく、先に硫黄岳を目指して進んでいた登山者が引き返してくる。それでも、行けるところまで登ってみようと進んだ。

実は、この時までピッケルの凄さを理解していなかった。ストックに比べて、1本のみで長さも変えられない。さらに重いし、持ちにくいと思っていたけど、もうピッケルがないと進めない。実際に強風を経験してみて初めてピッケルが

東天狗岳を目指す

どれだけ実用的で機能的な道具なのかを理解した。
硫黄岳に向かう登りは、多分私が一番手こずっていた。何度も強い風に心が挫けたが、仲間の励ましのお陰で、実力以上の力が出たと思う。最終的には硫黄岳は途中まで登り撤退。心残りもあるけれど、２日間たくさんの経験ができて、とても楽しく勉強になった山行だった。

三方分山・パノラマ台

渡辺　和美

山行日：令和６年３月31日（日）
地　図：２万５千図「精進」「市川大門」
行　程：県営精進湖駐車場（他手合浜）―精進湖バス停―女坂峠―三方分山―精進峠―根子峠―パノラマ台―　県営精進湖駐車場
参加者：渡辺峯雄、相川修、北原孝治、大澤純二、大澤さな枝、小嶋数文、高橋みゆき、石澤貴子、渡辺秀子、渡辺和美

桜の開花を遅らすほどの寒の戻りが過ぎ、今朝は少し暖かいが、黄砂予報もあり富士山が少し霞んで見える。７時３０分に精進湖他手合浜駐車場に集合。山頂からの富士山の姿を期待しながら、経験豊富なベテランの方や集合時間前に一座の登山をしてきたというバイタリティあふれる方、初心者級の私を含め１０人で山行を開始した。

精進湖北方にそびえる三方分山からパノラマ台までを縦走し、甲斐と駿河を結んでいた古の街道である中道往還を進んでいくという行程。まず、天然記念物の大杉があり、神社や寺院が並んでいる精進諏訪神社に寄り道し、精進集落へ入る。昭和の生活感が残る廃墟を見ると、懐かしいという声も聞こえた。峠道の埋もれるような石仏や石積みの跡など、往還の面影を感じながら緩い傾斜を登って行った。家康もこの道を歩いたのかな？　馬に乗ってかな？　と歴史的なロマンを感じながら、阿

富士山を背負って

難坂（女坂）峠分岐を左に進んだ。その後、急傾斜を登ると三方分山山頂。八坂（身延町）、精進（富士河口湖町）、古関（甲府市）の三方を尾根で分けているのが特徴である。富士山の姿も絶景！　スタート地点の精進湖が一望でき、「子抱き富士」とも呼ばれる大室山と富士山の姿は雄大な中にも優しさを感じた。

精進山・精進峠・偉主山・根子峠と、左に富士山、右に南アルプスの山々を眺めながらの稜線歩きは、山の風が爽快で実に気持ち良かった。登山道の両わきには馬酔木の花が咲きはじめ、中には満開の木もあった。かつて登った山の話に花が咲き、終始穏やかで楽しい山歩きをした。パノラマ台を目前にした時、ふと振り返ると三方分山から縦走してきた山並が一望できた。この長い行程を歩いてきた参加者一同は、自分のがんばりを密かに褒めたことだろう。

パノラマ台で昼食をとった。精進湖・本栖湖・西湖や河口湖が見え、富士山と青木ヶ原樹海が一望できる景色に感動した。一日中私たちを見守ってくれた富士山に感謝して山行を終えた。

蜂城山・神領山・大久保山

臼田　昌美

山行日：令和6年4月6日（土）
地　図：2万5千図「石和」
行　程：みさか桃源郷公園―蜂城山登山口―蜂城山―神領山―大久保山―那賀都神社―蜂城山登山口
参加者：磯野澄也、北原孝浩、中村光吉、大澤純二、大澤さな枝、小嶋数文、鶴田陽子、鶴田輝世、山本かおる、臼田昌美

一宮町の馬蹄形に連なる「神山三山」へ。桃花の開花に合せて若緑立つ新緑の中、春山周回を楽しんだ。

桃畑の登山口・天神社参道には、夏祭りに一晩中篝火が灯されたという石灯籠が置かれる八十八曲りの急坂があって、少し汗する。コナラ樹林の途中にあった、幹囲1.5メートルのヤマボウシの大木は枯死して看板跡のみ。赤松、檀香梅、山桜が彩る中、南アルプスを展望する鳥居の先が1座目の蜂城山（738メートル）。岩崎氏の山城だった跡に、菅原道真公を祭神とし、書道展も行う蜂城天神社が建てられた。狼似の尾も可愛い狛犬が護る本殿は、台風被害から修復されて元に戻り、素晴らしい木

彫（道真公の梅に鶯・龍・雲）を間近に拝観することが叶うようになった。

この山城土塁跡の横から赤松の急坂を降り、茶臼山分岐を過ぎると、冷涼な檜林の登り坂に入る。枝を広げた赤松の大木、可憐な豆桜を眺め広葉樹林の分岐に着く。この先、倒木アスレチック（笑）を楽しみ、2座目の神領山（866メートル）。恩賜林石柱だけの質素で狭い山頂が、今日の最高峰である。

分岐に戻り、広めの西尾根を下るコナラ林は、カエデ、ガマズミの若葉が目に優しく映る。足元は倒木多く、ウロコ茸が木に鱗の如くびっしり着く「倒木アート」の世界。ひときわピンク目印が目立つ山宮神宮分岐を、左に進むと、3座目の大久保山（664メートル）。

那賀都神社にて

その先、那賀都神社（祭神は牛頭天王）の御神木の赤松は、根廻4.6メートルの大きく手を広げた銘木だったが、これも枯死し、今はその根元に幼芽が顔を出している。ここで、昼食と春の野点。梅、桜、菜の花の和菓子とお抹茶で、春を味わいつつ、和みの一時を過ごした。

食後、北尾根の先端まで下って大文字焼点火場。ここは最高の展望台である。青空の山座同定をしつつ、今夏の山々への期待が膨らむ。眼下には、日本一の桃畑「ピンクの桃源郷」が広がる。

ゲート先、ヒナスミレ咲く道を降りて、桃畑の中を歩き山宮大明神の鳥居の前に出る。甲斐国一宮浅間神社の創祀の地で、今日歩いた三山が全てこの神域であり「神山三山」と呼ばれる事を思い出し、道中の無事を感謝して、手を合わせた。

茅ヶ岳と深田祭

磯野　澄也

山行日：令和6年4月21日（日）

地　図：2万5千図「若神子」「茅ヶ岳」

行　程：深田記念公園―女岩―稜線―茅ヶ岳―防火帯

道―深田記念公園・深田祭へ参加

参加者：磯野澄也、古屋寿隆、北原孝浩、萩野有基子、大澤純二、大澤さな枝、臼田昌美、黒沼英美、石澤貴子、相川修、手崎喜美子、坂井広志

茅ヶ岳は、岳人ならば誰もが知る『日本百名山』の著者で登山家の深田久弥氏が、昭和46年（1971年）3月21日に登山中に脳卒中で他界されたことで知られる山だ。以来、氏の遺徳・功績を偲び、山麓で深田祭が開催されてきた。日本山岳会で定めた全国の13の山岳祭の一つであり、今回も本部の「引き継がれる山岳祭」プロジェクトリーダーである坂井広志氏にご参加いただいた。山梨支部でもその歴史・山岳文化を知るため会員に対し最優先するよう通知し、今回は11名の会員が参加した。

笑顔の山頂

深田記念公園に8時に集合し、ノーマルルートから茅ヶ岳を目指す。各自自由に登る記念登山、白鳳会主催の山頂トレッキング、中学生になった伴野嶺さんを囲むグループ等、今日の茅ヶ岳はいつにも増して賑わっている。登山道沿いには、春の花タチツボスミレ、イカリソウ、ニリンソウ、マルバスミレ等が出迎えてくれる。

女岩からは急登になりジグザクに登りきると、深田久弥先生終焉の碑が尾根上に佇む。手を合せたのち、暫く登ると山頂に着く。本来なら大パノラマが見渡せる場所であるが、曇天の中、うっすらと八ヶ岳・南アルプス・奥秩父の峰々が迎えてくれた。山頂は大勢の登山客で賑わい、あちこちで楽しい会話が弾んでいる。45分の滞在後、山頂を後にした。途中の多数のヤドリギ、色鮮やかなミツバツツジが目を引く。深田記念公園での祭の開始に間に合うよう急ぎ足で下山した。

13時半、第43回深田祭に全員で参加した。内藤韮崎市長、坂井プロジェクトリーダーの挨拶に続き、深田氏生誕地の石川県から参加された「深田久弥と山の文化を愛する会」の代表者が献花した。一般参加者も多く、今年も深田祭は盛大に挙行された。「百の頂きに百の喜びあ

り　深田久弥」の記念碑に、初めて参加した会員も感銘を受けたと思われる。

霧訪山（きりとうやま）

平松　清子

山行日：令和６年４月27日（土）
地　図：２万５千図：「北小野」
行　程：敷島総合文化会館―双葉スマートIC―塩尻IC―山ノ神自然園―たまらずの池―霧訪山登山口―霧訪山―大芝山―洞ノ峰―山ノ神自然園―塩尻IC―敷島総合文化館
参加者：荻野重行、岩間明子、村田幸子、鶴田陽子、渡辺和子、平松清子

当初、南高尾のニリンソウの群生地を訪れる計画だったが、花がほぼ終わっているので、皆さんにお話をして霧訪山に変更した。

お花の山で知られている霧訪山は、駐車場からニリンソウやヒカゲスミレ、山葵の花等が咲いていた。たまらずの池では、カスミザクラがまだ咲き残っていて出迎えをしてくれた。

春の日差し注ぐ霧訪山

標高を上げて行く度に、イワウチワやマキノスミレ、斑入りシハイスミレ、クロモジの花、カタクリの花が咲いていて、「ここにもこっちにも咲いている」「これは綺麗だね」などと、お花を見ながらいろんな会話が飛び交っていた。山頂ではオキナグサも芽を出していて、きたことを伝えていた。春がここまで登って

ゆっくりのんびり自然に触れながら植物観察をし、みんなでおしゃべりを楽しみながら歩いた山行だった。

田部祭と西沢渓谷

矢﨑　茂男

山行日：令和６年４月29日（月・祝日）
地　図：２万５千図「金峰山」
行　程：道の駅みとみ西沢渓谷入口広場―田部重治文

学碑―二股吊り橋（東沢大橋）―西沢遊歩道―滝見橋―トロッコ軌道跡林道―ネトリ大橋―道の駅みとみ

参加者：小宮山千彰、相川修、北原孝浩、渡辺峯雄、大澤純二、矢﨑茂男、小嶋数文、坂井広志、遠山若枝、大澤さな枝、萩野有基子、臼田晶美、山本かおる、松村明子、渡辺秀子

西沢渓谷入口広場で執り行われた第7回田部祭には大勢の登山者が参列した。山梨市観光協会三富支部の雨宮支部長から、今年も田部重治への敬意を込めたあいさつがあった。山開きの式典では、地元・大嶽山那賀都神社の日原宮司による神事が執り行われた。祝詞で、今シーズンの登山者の安全を祈願するとともに、田部の作品の一節が紹介され、今日の笛吹川源流域の隆盛の礎を築いた田部の功績が奏上された。最後に、登山道に張られた蔓に斧が振るわれる入剣の儀が行われて式典は終了。登山者が続々と、西沢・東沢に向かっていった。

田部重治文学碑を囲んで

山梨支部の参加者は、一足遅れて出発した。田部重治文学碑に着いて荷を下ろし、例年同様、献花を行い記念写真を撮った。

碑前を発って二股吊り橋を渡ると、沢岸にキバナシャクナゲが風に揺れていた。滝見台に立ち寄り、三重の滝の豪壮な流下を見下ろした。田部らの大正6年第3回東沢遡行は、当初、支流の西沢に分け入ることを目指して入渓したのだが、この三重の滝の水量と左右岩壁の険悪さを目の当たりにして、遡行を断念。東沢を三たび遡ることにした結果、東沢の完全遡行に成功した。この滝は、登山史の上で重要な意味を持つのである。

岩に張り付いて淡い光沢を放っている草花や、沢の釜にあふれる透徹な水、釜の側壁をうがつ甌穴など、学習教材は事欠かない。12時に沢岸に腰を下ろして昼食。薫風が沢を吹き抜けていく。私たちの他にも、西沢の歌声を聞きながら大勢が昼時の憩いの時間を過ごしていた。遡行を再開して15分後、立派に改修された滝見橋に着いた。豪雨によって損壊したこの橋が改修され、西沢の圧

巻「七つ釜五段の滝」の全容を3年ぶりに堪能することができるようになった。当局の尽力に感謝したい。

滝見橋を過ぎて、トロッコ軌道跡林道に登り上げた。アズマシャクナゲの群生地として名の通っている一帯であるが、今年は彩りが寂しいと嘆息が漏れた。ネトリ大橋を渡り、一日の収穫を語り合いながら山行は終了。田部祭・西沢渓谷記念ハイキングともに、今年も充実した「昭和の日」になったことを報告する。

富士山5合目（須走登山道）周辺

鶴田　惇

山行日：令和6年5月5日（日）

地図：2万5千図「富士山」「須走」

行　程：御坂保健・福祉センター駐車場―富士山須走口5合目駐車場―小富士―東富士山荘―幻の滝登山口―散策―須走口5合目―道の駅すばしり―御坂保健・福祉センター

参加者：平松清子、古屋寿隆、中村光吉、末木佐登子、保坂美佐子、遠藤辰也、上田謙治、渡辺和子、大澤純二、大澤さな枝、鶴田惇、鶴田真那、村田幸子

「GWにどこか登りたいけど、どこにしよう？」と思いあぐねていたところ、大澤夫妻から今回の山行を教えていただいた。支部の山行へは初参加だったが、平松さんを中心に穏やかで暖かい雰囲気で、肩肘張らずにチームに入れていただくことができた。

メインの「幻の滝」は昼食後の楽しみにとっておき、まずは小富士へ向かった。シラビソの倒木からの甘い香りや犬の形をした岩などを楽しみながら苔むした道を進むと、一気に視界が開け絶景が広がった。小富士の頂上は人が少なく、人目を気にせずにしばしの自由時間。地面に横になって地熱を感じくつろいだり、富士山をバックにジャンプしている写真を撮ったりと、山の玄人ならではの楽しみ方を伝授していただいた。東富

幻の滝の音を聞きながら

士山荘へは同じ道を引き返すコースだったが、平松さんがタケシマランやマイヅルソウを見つけては教授してくれ、往路では気づかなかった春の訪れを感じることができた。

東富士山荘で、早目のお昼。キノコソバやキノコ鍋、キノコチャーハンなどキノコ料理が並ぶ中、私はシドケパスタを注文した。少し苦みを感じるも、その苦みが心地よく美味だった。その後、いよいよ「幻の滝」へ向かった。溶岩の道をしばらく歩くと、水の流れが見えた。大喜びで写真を撮っていると、これはまだ序の口で、メインはここからだとのこと。登るにつれて、まさに雪解さなかの場所もあり、迫力ある滝にも出会えた。ここでも、しばしの自由時間。くぼんだ溶岩に寝てみると、溶岩は硬いのに、絶妙なフィット感で気持ち良がよい。雪解け水でさぞかし冷たいのだろうと滝の水へ手を入れてみたが、さほどのことはなかったのは不思議だった。

帰途、「道の駅すばしり」にて、土産にメロンの浅漬を購入し富士山ソフトを食べた。これも含めて大満足の山行だった。今後も機会をみつけて参加したい。

蝶ヶ岳

窪田　光一

山行日：令和6年5月5日（日）・6日（月）
地　図：昭文社5万図「槍ヶ岳・穂高岳」
行　程：5日　上高地河童橋（徳澤園）—長塀山—蝶ヶ岳—蝶ヶ岳ヒュッテ（泊）
　　6日　蝶ヶ岳ヒュッテ—横尾山荘—徳澤園—上高地河童橋
参加者：小宮山千彰、相川　修、窪田光一、高橋みゆき、飯島典子、日向直子、福田千絵、曽我結希

「ゴールデンウィークの雪山を登りライチョウと出会い、槍・穂高の大パノラマを堪能する」というたい文句に釣られて参加した。10本爪以上のアイゼン、ピッケルが必要という雪山にやや不安な気持ちがあったが、当日は快晴。中央高速道からは北アルプスが眺望でき、期待を胸に上高地へ向かった。小梨平で、テント泊していた東京からのメンバーと合流した。

スタート直後から可憐なニリンソウの群生が白い絨毯のようにみえて、徳沢園までは快調に足も動いた。徳沢を過ぎると急登になって、樹林帯の中を黙々と登った。積雪が増えてチェーンアイゼンを装着し、長塀尾根とい

う名前の通りの長い急登を頻繁に休憩しながら慎重に歩を進めた。

どうにか長塀山山頂に到着。雪に埋もれた妖精の池を過ぎると素晴らしい眺望が開けた。うたい文句の通りの槍・穂高の大パノラマである。雪をかぶった槍・穂高連峰の凛とした姿を思う存分堪能すると、今までの苦労が報われた気分。その光景を瞼に焼き付け山頂経由で蝶ヶ岳ヒュッテに到着した。

早速、穂高に映える夕焼けを見ながらビールで乾杯、登山の疲れを癒した。ヒュッテの夕食は、山荘とは思えないメニューで、赤味噌づくりのお汁もとても美味しかった。また、メンバーの知り合いの小屋スタッフから地元ワインの差し入れがあり、誕生日を迎えるSさんを賑やかにお祝いできた。

山旅の仲間たちと

翌朝は、生憎の曇天模様。強風で小雨も降る中ヒュッテを出発し、常念岳の稜線を眺めながらしばらく歩くうちに雨もあがった。すると目の前にライチョウのつがいが現れた。恐れる風もなく何かを啄ばんでいる様子は、愛らしく時間を忘れた。しばらく行くと、また別のつがいのライチョウが現れた。彼らに見送られながら横尾へ。途中、槍見台で槍ヶ岳を眺めて一服。その後横尾山荘を抜け、徳沢園へ。そこで昼食・ソフトクリームを美味しくいただき、定刻通り無事に河童橋についた。

バスターミナルで東京組と別れて帰途についた。元気な女性陣などメンバーに恵まれ、内容盛沢山の思い出に残る山行であった。

クライミング講習会（1）

近藤　美奈子

山行日：令和6年5月12日（日）
地　図：2万5千図「河口湖東部」
場　所：三ツ峠天狗岩・屏風岩
参加者：古屋寿隆、石澤貴子、近藤美奈子、石ケ谷侑希、清水純也

◇午前　天狗岩

エイトノット・懸垂下降。今回初めてクライミングを体験する方が、初っ端から懸垂下降で降りる。登るより降りるほうが先。きゃー。出だしが怖いのである。わかる、わかる。最後に、古屋さんの番。子どものような無邪気な笑顔で降りてくる。後ろ姿はまるで40代！

登り・トップロープでのビレイ。毎回、お互いに確認し合ってから登り始めること、慣れは禁物。よく足場を見て。足を一歩上げれば新しい世界が見えてくる。ロープがたるまないように、ビレイヤーの速度に合わせて登る。速く登ることがかっこいい訳ではない。

あっという間にお昼ご飯の時間に。三ツ峠山荘で、おいしいかき揚げうどんをいただいた。今日は肌寒く、温かいスープがお腹に染み渡わたる。

富士山が見下ろす

◇午後　屏風岩

中央カンテルートの1ピッチ目、トップで登る。いつか上まで行ってみたいな。登りとビレイを練習し、3時終了。三ツ峠山荘中村さんの息子さんが温かいコーヒーを淹れてくださった。ありがたさが身に沁みた。

昨年10月の終わりに、ここで山梨岳連のクライミング研修会があり、それから8か月。季節は秋冬春を通り過ぎ、夏が始まろうとしている。また来よう。中央カンテの上まで登ってみよう。足を一歩上げれば新しい世界が見えてくる。

クライミング講習会（2）

高橋　みゆき

山行日：令和6年5月18日（土）・19日（日）

地　図：2万5千図「金峰山」

場　所：小川山クライミング場～廻り目平キャンプ場

参加者：古屋寿隆、手崎喜美子、近藤美奈子、中田雅弘、荻原賢治、黒沼英美、相川修、高橋みゆき、大神耕介

今回のクライミング講習は、クライマーの聖地といわれる信州川上村の小川山で行われた。これまで三ツ峠や、小瀬スポーツ公園のクライミング場で学んできたクライ

ミング技術を発揮したい、宿泊して親睦を深めたい、という趣旨である。参加者の経験値やレベルに差がある中、たくさんのルートがありキャンプ場もある小川山は、最適の講習場所であった。

1日目のスラブ状岩壁ガマルートでの充実した講習を終えて、2名は日帰りで帰路につき、夕方までに新たに4名がキャンプ場にて合流した。たくさんのキャンパーが集っている。私たちも焚火しながら、持ち寄った夕餉と山談議で夜は尽きることがない。コロナ禍で自粛続きだったが、ようやく仲間たちと山を楽しむ日常が戻ってきていることに、幸せを感じた。

スラブでの奮闘

2日目は、初心者向きのガマスラブにてトップロープ講習と確保の練習。その名の通りガマガエルの背中のようなスラブを登攀する。広大な傾斜で足をきちんと置かないとずるずると滑り落ちる。この上部に5ピッチのガマルートがあるのだが、降雨もあり今回は中止となった。

改めて、クライミングは楽しい！と実感。技術を高めて、また外岩で実践登攀したいと思うのでよろしくお願いします。ありがとうございました。

登山・ハイキングのための ロープワークとレスキュー技術講習会

手崎　喜美子

山行日：令和6年6月1日（土）
地　図：2万5千図「甲府北部」
場　所：緑が丘スポーツ公園上の広場
参加者：古屋寿隆、上田謙治、相川修、河野芳尚、荻原賢治、平松清子、遠藤辰也、黒沼英美、手崎喜美子、中田雅弘、小池雄一郎、宮澤千穂、渡辺由紀子、大神耕介、石川千嘉

3年前に、アイスクライミングがしたい！ロープワークを覚えたいので教えてほしい！と山梨支部に入会したが、当時の私は8の字結びがかろうじてできるかくらいの知識しかなかった。クローブ・ヒッチは「徳利結び」と教えていただいた。そのクローブ・ヒッチは、お菓子

のハートパイを作って素直に重ねる！　今回は３回目の参加。スリングを使っての簡易ハーネスの作り方、スリング・ザック・レインウエア・ストック等を使っての背負い搬送、ストックで松葉杖を作る、ツエルトとカラビナ・スリングを使っての搬送、ツエルトの張り方２種、１：１、２：１、３：１引き上げシステム。

今年のアイスクライミングでロープをアイゼンで蹴り込んでしまい、切れそうな部分をバタフライ・ノットで防いだ。私のミスでビレイデバイスを落としてしまった時は、ムンター・ヒッチでセカンドを引き上げた。リードする人をセカンドで確保するときは、必ずメインロープでセルフビレイをクローブ・ヒッチで取る、なぜならセカンドが落ちた時、自分の体が引き込まれないために。

レスキュー技術の習得を目指して

３年間の実践を通してロープ技術を教えていただいている。ありがたい環境だと思う。ただ、レスキュー面では不安がかなりある。昨年からハイキングの時でも補助ロープやカラビナ・スリング等背負っているが、自分が果たして緊急事態に陥った時に適切な行動ができるのか心配だ。普段使わないストックも持ち歩いている。年に一度ではなく頻度を上げて開催したい。もっといろいろな講習会にも参加したいと思う。

笠無（かさなし）

矢崎　茂男

山行日：令和６年６月８日（土）
地　図：２万５千図「谷戸」
行　程：北杜市役所高根総合支所―林道比志海岸寺線登山口―山頂―見晴らし岩往復―建石―登山口―高根総合支所
参加者：小宮山千彰、北原孝浩、渡辺峯雄、大澤純二、上田謙治、小嶋数文、臼田晶美、松村明子、矢﨑茂男

甲斐百山を巡る山行の一環として、北杜市の笠無に登った。笠無は、国道１４１号線沿いの箕輪辺りから指呼

の間にそびえる山。笠の形状を備えた山容端麗の山であるが、意外にその存在と名前は知られていない。近くて遠い里山である。

山行日は快晴。北杜市役所高根総合支所から車2台に分乗して林道比志海岸寺線の登山口へ。身支度を整えて枝林道に分け入った。これをわずかにたどった先で左の尾根に取りつく。枝にこんもりとした鳥の巣があり、中に2羽のひなと2個の卵。人が触れると親鳥が巣を放棄することがあるという。そっとその場を離れた。

謎の多い笠無

里から見上げると曲線美を呈する笠無であるが、この曲線は胸突き八丁の急登である。小刻みに休憩をはさみ、ハルゼミやツツドリの合唱に耳を傾けながら高度を上げていく。山頂に着いて一服後、東の尾根上の見晴らし岩を往復した。いつの間にかガスが湧いて、眼の前に展開するはずの八ヶ岳の大観に歓声を上げることはかなわなかった。

山頂に引き返して昼食。その後、この山の山名由来についてミニ講座を開講した。笠の形をした形状から冠せられた名前であることは理解できるものの、「無し」とはどういう意味なのか。これは、諏訪の風鎮めの「笠無神事」や、北麓の風除けを願う「風の三郎社」との関連から、風にまつわる諏訪の信仰が深く影響しているのではないかというのが、筆者の仮説である。各人各様、研究してほしいと結んだ。

12時過ぎ、建石を経由する尾根を下った。建石とは自然石が石碑のように立ち上がっている大岩である。命名者は不明だが、この山に名所を設けたいとの善意が伝わってくる。ここを過ぎると伐採地が続き、南から東にかけての大展望が広がった。

コアジサイの咲く枝尾根を分けて林道へ。予定時刻通りに下山を終了した。近くて遠い里山が、今後いっそう日を浴びてほしいと願う。

三ツ峠

磯野　澄也

山行日：令和6年6月16日（日）・17日（月）
地　図：2万5千図「河口湖東部」
行　程：16日　金ヶ窪沢登山口―三ツ峠山・木無山花観察―三ツ峠山荘―交流会―除草作業―懇親会―三ツ峠山荘（泊）
17日　三ツ峠山荘―三ツ峠山花観察―三ツ峠山荘―母の白滝―富士浅間神社
参加者：磯野澄也、平松清子、萩野有基子、臼田昌美、遠藤辰也、中田雅弘（2日目）、黒沼英美・高橋みゆき・手崎喜美子・石澤貴子（日帰り）

昨年のJAC自然保護全国集会高尾の森づくり研修での本部・多摩支部との交流から、今回の三ツ峠の高山植物交流会開催となった。JMSCA本部自然保護委員会でも三ツ峠で学習会があり、小高委員長はじめ16名、JAC多摩支部河野委員長以下9名、本部自然保護委員会下野委員長と委員の2名、山梨支部11名（講師の中村光吉さんを含む）が参加した。

初日、山梨支部は金ヶ窪沢登山口から山岳レインジャーを兼ねて山荘まで高山植物等を学んだ。普段何気なく通り過ぎる登山道沿いの植物を知ると、また楽しみが増えることを実感する。山頂・御果鷹山手前までの高山植物観察では、年々減少するカモメランが大変気になった。昼過ぎに三ツ峠山荘に集結して交流会を開催。団体ごとに自然保護活動の紹介を行った。交流会後は中村さんの案内で、木無山の柵に囲われたアツモリソウ、キバナノアツモリソウの美しさをじっくり味わった。テンニンソウ除去作業を行いながら、中村さんの地道な保全維持活動に頭の下がる思いがした。夜には本部・多摩支部・山梨支部の懇親会もあり、他の団体の活動を学ぶ有意義な場だった。

保全の労苦に思いをはせながら

翌朝は快晴。爽やかな展望が広がっていた。朝食前に山頂・屏風岩周辺を散策し、植物観察と史跡の学習を行った。食事後、多摩支部は保全作業、山梨支部は母の白滝経由で河口湖浅間神社に下った。途中、クサタチバナの

群生を発見。浅間神社の大杉を見上げて歓声を上げ、解散した。参加者が様々な収穫を得ることのできた山行だったと思われる。

笠ヶ岳

高橋　みゆき

山行日：7月12日（金）～14日（日）
地　図：昭文社「槍ヶ岳・穂高岳」
行　程：新穂高温泉―わさび平小屋―鏡平山荘（泊）
　　弓折岳―大ノマ岳―抜戸岳―笠ヶ岳山荘（泊）
　　抜戸岳―笠新道―新穂高温泉
参加者：小宮山千彰、中田雅弘、高橋みゆき、加瀬　尚、
　　湊　ちせ、橘　希代子

まだ梅雨明け前の週末。登山口の新穂高温泉は傘をさして出発、鎌田川左俣林道から小池新道に入った。橋のたもとに「槍ヶ岳へ」の標識をみつけ、ここから槍ヶ岳に至るルートを妄想する。秩父沢を渡る頃には傘をたたみ、シシウドガ原で現れた山並みに一同大歓声。撮影タイムを取りながら、ゆっくり鏡平小屋に到着。夕食後鏡池に行ってみる。青空に槍ヶ岳～大キレット～奥穂～西穂の稜線がくっきりと見え、湖面はまさに鏡。日が傾くと稜線が赤く、そして金色に染まり夕闇に沈んでいく。明日は晴れの予報。どんな絶景が見られるのだろう。

翌朝弓折乗越に登ると、目の前にドーンと槍穂が現れた。北鎌尾根の凹凸がまるで生き物の背骨のようだ。その背骨にしがみついている自分を妄想する。ここからの登山道は、リーダー一押しの大展望が広がっていた。私の人生初の山旅は水晶岳～双六岳であった。30年前の記憶が一瞬で蘇ってくる。いつか繋げて歩きたい。秩父平の美しいお花畑を通り、笠ヶ岳山頂に立った。雲が湧いて山頂からの展望はなかったが、ここまで辿ってきた天空の散歩道に、皆大満足であった。全員で登頂できたことが嬉しくて、どの顔も笑顔で輝いていた。

翌朝は一面のガス、早々に下山を開始する。

登頂の喜び

雷鳥の親子が現れて気をつけてねと挨拶してくれた。下りは笠新道。予報より早く雨が降り始め、滑りやすい岩場、気を抜けない急坂が続く。先を行くソロの女性が、登山に不慣れなのか道を間違え困惑している。中国の留学生で、最終バスに乗って帰るのだという。彼女を列の真ん中に入れて一緒に下山した。山で出会った小さな国際交流。素晴らしい仲間たちと、心に残る山行であった。皆さま、素敵な3日間を共にしていただき、ありがとうございました。

笹ゆりも　笑顔がゆれる笠新道
濡れて歩けば　絆深まる　―中田―

乗鞍岳

村田　幸子

山行日：令和6年7月20日（土）～21日（日）
地　図：昭文社「乗鞍高原」
行　程：20日　敷島総合文化会館―乗鞍観光センター―畳平―白雲荘―お花畑―乗鞍スカイライン―大黒岳―鶴ヶ池―白雲荘
21日　白雲荘―エコーライン―肩の小屋―剣ヶ峰―富士見岳―白雲荘―畳平―乗鞍観光センター―敷島総合文化会館
参加者：平松清子、磯野澄也、遠藤辰也、荻原重行、末木佐登子、臼田昌美、岩間明子、渡辺和美、松村明子、村田幸子

可憐な高山植物が咲き誇るお花畑と日本百名山の剣ヶ峰、満天の星空、御来光、初めての山小屋泊。家族の了承を得て、参加を申し込んでから期待に胸を膨らませて当日を迎えた。

梅雨明けし、うだるような暑さとなったので、ザックに入れておいた上着を1枚減らしてしまったことを後悔した。天気予報では曇りから晴れだったので、乗鞍観光センターからシャトルバスへの乗り継ぎ時の激しい雨もさほど気にならなかった。しかし、畳平へ着いた時には、徒歩3分の白雲荘へも行けない程の大暴風雨となった。それでも予報は昼前には晴れ。　待機している間に高山植物のパンフレットと味噌おでんを片手に学習会となった。ミヤマキンポウゲとミヤマキンバイ、ミヤマダイコンソウ、ヨツバシオガマ、ハクサンチドリ、似ていて区別が難しい。

雨はなかなか止まず3時間の長居となった。剣ヶ峰登

山の予定を変更して、バスターミナルで昼食をとり、小屋へデポして濃霧と強風と寒さの中お花畑へ向かった。幸い雨は止んだのでゆっくり散策することができた。初めて目にしたクロユリの群生、道端に咲くイワキキョウの紫が印象的だった。乗鞍スカイライン経由で大黒岳へ。霧の中だが、足元の花々が私達を楽しませてくれた。下山途中でパトロールの方から熊の目撃情報があった事を知らされ驚いた。

小屋では飛騨牛すき焼き豪華メニューに檜風呂、パリッとした白いシーツのお布団。2段ベッドの上段3人用を1人で広々使わせてもらった。一晩中、風の唸り声が聞こえたが、小屋はストーブが焚かれ暖かく、とても快適な一夜だった。

雨上がり、霧晴れて

2日目、濃霧と強風だがブロッケン現象の可能性に期待して向かったが残念だった。朝食を済ませ、霧の中、剣ヶ峰向かった。時々、霧が晴れる瞬間があり、雷鳥のつがいにも出会う事が出来た。ガレ場一面に流れるように咲いているコマクサの群生には、可憐ななかに逞しさを感じた。山頂では運良く霧が晴れ、来て良かったと思える展望だった。雲の中だが、槍ヶ岳の頭を見ることが出来た。ベストシーズンだけあって登山者が長蛇の列で渋滞していた。

山行では天気の変化への対応、高山では真夏でも防寒対策をしっかりすること、雨具の重要性を痛感した。天気予報に振り回されたが、充実した楽しい山行だった。

焼岳

磯野　澄也

山行日：令和6年7月26日（金）・27日（土）
地　図：2万5千図「上高地」
行　程：26日　北杜市役所―沢渡―大正池―田代橋―上高地山岳研究所（山研）―明神池―山研
27日　山研―田代橋―焼岳小屋―展望台―焼岳小屋―田代橋―山研―上高地―沢渡

―北杜市役所

参加者：磯野澄也、平松清子、古屋寿隆、渡辺峯雄、手崎喜美子

焼岳は２０００年頃、支部山行で登って以来四半世紀ぶりの再訪である。当時の山梨支部員はまだ全体的に若く、バスで朝からワイワイ飲みながら大変元気だった。

今回はのんびり山行と決め、初日は大正池を８時過ぎに発って上高地山岳研究所（山研）に向かった。新人の頃、当時の大正池には枯木が多数あり穂高を水面に映して風情があった。田代池は埋まり川わった。それでもやはり天下の上高地、美しい自然は健在である。ウエストン碑前では日本山岳会結成に尽力した山岳人に、古屋支部長が感慨深げに見入っていた。

３時間ゆったり歩いて山研へ。荷物をデポし明神池に向かう。生憎曇り空であったが、夏の樹木・高山植物・川のせせらぎなど、自然を存分に満喫する。山研ではご飯は出るが、おかずは手作りだ。女性のおかげで食卓が賑わってありがたい。意外にも、上高地の夜は暑かった。

翌朝は爽やかに晴れ渡った。７時に山研を出発し焼岳へ。登山口には流石に活火山であるため「自己責任」の文字がしつこいほど表示されていた。極力、山頂に立ち入らないよう注意喚起されていたので、予め山頂へは行かないことにしていた。樹林帯を登る。途中で休憩とっているとサルが出現。一向に人を気にする気配がない。樹林帯を抜けると峠沢と焼岳の荒々しい山容と噴煙が確認出来る。２０００メートル付近の垂直なアルミ梯子を乗り切りジグザクの登山道をたどって、新中尾峠を越えると焼岳小屋に到着した。

焼岳の全容が見える展望台には１５分くらいで着く。所々の生暖かいガスが噴出し不気味だ。山頂はじめ、西穂高岳・奥穂高岳・笠ヶ岳、眼下には上高地・新穂高温泉と大展望が広がる。大自然を満喫し、２時間強で登山口に下山した。

ゆったりとした２日間の山行。皆満足感に浸り上高地を後にした。

男山・天狗岳　　小宮山　千彰

山行日：令和６年８月18日（日）

地　図：２万５千図「御所平・信濃中島」

行　程：敷島総合文化会館駐車場―JR野辺山駅前駐

車場―馬越峠―天狗山山頂―垣越山―男山山頂―天狗山山頂―馬越峠

参加者：小宮山千彰、手崎喜美子、加瀬尚、湊ちせ

快晴の朝敷島の集合場所から乗り合わせで野辺山に向かった。野辺山駅前で湊さんと合流し馬越峠へ。峠の駐車場からすぐに急登が始まる。歩き出しからこの急登はきつい。一汗かいたところで頃鎖場が出てきたが、皆3点確保で快調に乗越して、登山開始から1時間30分ほどで天狗山山頂に到着。

浅間山、八ヶ岳、奥秩父の大展望だ。小休止の後男山へ向かう。一旦縦走路の鞍部まで下るが岩の急坂で気が抜けない。垣越山付近は下山路が何本もあり迷わないよう注意が必要だ。男山直下は急な岩場であったが危険な箇所は無く全員で山頂に立った。

山頂で昼食を摂っていると、男山ダイレクトのクライミングをして登ってきた2人に会った。ここは岩山でクライミングのルートも何本かあり格好のゲレンデになっている。山頂での展望を楽しんだ後、同じルートを下山。途中天狗山の下山路鎖場でロープを使い下山確保の練習をして遊び、無事馬越峠に到着。帰りに川上村のスーパーで地酒や野菜を買って帰路についた。暑かったが爽快な登山だった。

富士山奥庭

遠藤　辰也

山行日：令和6年9月14日（土）

地　図：2万5千図「富士山」「鳴沢」

行　程：奥庭―三合―二合―一合―長尾山―富士風穴―精進湖登山口入口

参加者：磯野澄也、北原孝浩、小島数文、臼田昌美、小池雄一郎、遠藤辰也

シーズン終了して間もない富士山精進口登山道をひたすら下山。この道は大正12年に精進湖から山頂までのルートとして開設された。今回は富士スバルライン奥庭から県道71号線（富士宮鳴沢線）まで約１２００メートルを降下した。

まず下山口の県道71号線に車をデポしてから富士山駅に向かい、そこからバスで奥庭まで移動。奥庭を散策して、見上げる富士山とパノラマを堪能したあと下山開始。奥庭付近はダケカンバやシラビソが多いが下山につれてカラマツが増えてくる。四合目付近は苔の森の色が

長尾山にて

鮮やかでついつい足が止まる。途中倒木も数か所あったが勾配はきつくなく歩きやすい。

三合目で昼食。ここはスバルライン五合目から降りてくる道や河口湖町からの船津口登山道と交差しており明るく開けた広場になっている。9月とは思えない暖かい空気の中のんびりと時を過ごした。

出発してすぐスバルラインをくぐり、クマザサやシラカバが増え始め植生の変化を感じる。二合目を過ぎ、ふじてんリゾートスキー場の上部をかすめて長尾山に向かう。長尾山は今回の山行の目的の一つで、894年の貞観大噴火により多量の溶岩を流し、当時あった大きな湖（せの海）を埋めて西湖、精進湖、本栖湖を作った山らしい。そのような大きな地殻変動を起こした山とは思えないほど小柄な山だったが、歴史に思いを馳せるには十分な鬱蒼とした森でもあった。

その後大室山の横を抜けて富士風穴で小休止、そしてデポした車に到着。約7時間かけてゆっくりと下山したが、ほぼ下りだけの山行は初めてで、前太ももの筋肉だけが張るという普段とは異なる疲労が出たのが面白い経験であった。また息が切れることがないので、先輩方の体験談を歩きながらいろいろ聞けて勉強になった。たまにはこのような富士山の楽しみ方もいいと思った。

鳳凰山

湊　ちせ

山行日：令和6年10月12日（土）～13日（日）
地　図：2万5千図「鳳凰山」
行　程：12日　夜叉神峠駐車場―夜叉神峠小屋―辻山―南御室小屋―薬師岳小屋
　　13日　薬師岳小屋―薬師ヶ岳―観音ヶ岳―薬師岳小屋―夜叉神峠駐車場
参加者：石澤貴子、古屋寿隆、村田幸子、加瀬　尚、鈴木　明、湊　ちせ

いつも眺めている鳳凰山。あんな高い山に登れるかしらと不安もあった。学生時代に元登山部の友がいて、女

４人、屋久島や東北の山を登ったが、約45年全く登山をしていなかったからである。昨年低山歩きとトレーニングを始めた。一人で歩く力をつけたくて登山講座も受講した。鳳凰山山行に受講生も可とあったので、せっかくの機会と思い応募を決めた。

10月半ばの朝6時。夜叉神峠駐車場からリーダー石澤さん、私、加瀬さん、鈴木さん、村田さん、サブリーダー古屋さんの順番で歩いた。秋の陽が木々の間を揺れ輝く中、緩く時には急にまた緩くという道を長く歩いていく。予定通り2時過ぎに薬師岳小屋に到着。小屋の外のテーブルを囲んで皆で乾杯。山は冬のように寒く上着を着込んでマフラーという装いである。リュックに残った食べ物を各々配る。ピーナッツなどのつまみになるものが思いの外嬉しい。

朝の薬師岳

次の日の朝、小屋近くの砂払岳に日の出を見に行く。富士山と雲の中から赤く出てくる太陽。南御室小屋キャンプ場から登ってきた人達も、皆それぞれ静かにシャッターをきっている。朝の光に照らされた木々の上に薬師岳がくっきりと山容をみせている。

朝食後、薬師岳・観音岳へ。薬師岳頂上視界良好、観音岳では雲で地蔵岳方向は全く見えない。山での一瞬の雲の流れの速さに驚く。帰路も順調で、夜叉神峠では小屋の豚汁を食べながら皆で輪になって話す。夕べの酒席とはまた違うお話が古屋さんからあった。地図読みや時間配分の大切さ。リスク管理の大切さ。レスキューシート、雨具、ヘッドランプは常に持つこと等。

秋の鳳凰を楽しみ、山への向き合い方も学んだ2日間。リーダー石澤さんにも感謝。青空に高くそびえる鳳凰山、私あの場所に行ってきたんだと思うと嬉しい気持ちになるのである。

奈良倉山

平松　清子

山行日：令和6年10月26日（土）

地　図：2万5千図「七保」

行　程：道の駅こすげ（帰り車1台デポ）―鶴峠―奈良倉山―松姫峠―鶴寝山―大マテイ山―大ダワ―道の駅こすげ（運転手のみ）―小菅の湯

参加者：磯野澄也、渡辺峯雄、小島数文、遠藤辰也、鶴田陽子、岩間明子、荻野重行、渡辺和美、保坂美佐子、平松清子

奈良倉山は、山梨県大月市と北都留郡小菅村の境にある標高1348メートルの山で、富士山の眺めがよいことで定評がある。鶴峠登山口からスタートして、しばらく歩くと廃車トラック。中々の年代物である。また、いろいろなキノコや所々の紅葉がとても綺麗だった。奈良倉山山頂に着いて大休止。心地よい自然林の頂である。西の尾根を下り松姫峠へ。峠の名前は、武田信玄の娘である松姫が織田勢から逃れる際に、ここを越えたという伝承に由来している。立派なトイレがあってありがたい。

山頂に笑顔あふれる

松姫峠からは大菩薩峠へも登山道が整備されている。広葉樹の森が広がり、新緑やお花の時期、紅葉の頃は散策にオススメである。登山道には野生動物やここに咲く花の看板もあった。

大マテイ山という面白い名前を帰ってから調べてみた。「マテイ」は「惑う」が転訛したと言われ、その昔、里人がこの付近でよく惑わされた（間違った）のが由来だそうだ。しかもただ惑わされたのではなく、「大マテイ」だけに大惑いしたのかなと思った。

今回の山行は、植物の名前を覚えたり、地図読みしたり、紅葉に足が何回も止まったりと収穫が多かった。一日中ガスって富士山は見えなかったが、実に楽しい山行だった。

御座山（おぐらやま）

橘　希代子

山行日：令和6年10月27日(日)

地　図：2万5千図「信濃中島」

行　程：北巨摩合同庁舎―栗生登山口―不動の滝―前

御座山―御座山―前御座山―不動の滝―栗生登山口―北巨摩合同庁舎

参加者：相川　修、荻原賢司、石澤貴子、手崎喜美子、村田幸子、菊池千恵子、橘　希代子、山本かおる

暑くなく寒くもなく風もない穏やかな秋晴れの一日。山登りに最高のお天気だった。

栗生登山口には、楽しく登れそうな気持ちにしてくれるイラストマップがある。そんなに時間がかからずに２０００メートルより高い所に行くことができ、頂上は岩がゴロゴロで眺めが良いとのこと。とても楽しみでワクワクしてきた。安全に登ることを自分に確認しての出発である。

神座す山頂で

ＣＬを先頭に歩き始めた。「ペースは大丈夫ですか？」「出来ればもう少しゆっくりお願いします」。山岳会の方には申し訳ない程ゆっくり登った。登りが結構キツイなーと思いながら足を運ぶと、水の音が聞こえてきて不動滝に到着、そして休憩。お菓子が色々回ってくる。初めてお会いする方や、初めてお話しする方ばかりだが、一緒に歩いているだけでとても親しくなった気がしてくる。不思議である。

青空が見えてきて紅葉も美しさを増してくる。黄色、朱色、赤、明るい黄緑、それに加えてダテカンバの白い幹と青空。自然が見せてくれる色彩の美しさに大満足である。

そして、いよいよ鎖場。慎重に確実に足を置いてゆっくり登る。ＣＬ・ＳＬの指示の下、無事に通過できた。避難小屋を過ぎてすぐ、突然明るくなり岩場が現れた。「わーっ、着いたー」。視界が広がり、思わず歓声が上がる。まさしく御座山、神様がお座りになって下界を見下ろすのに丁度いい平な岩がそこここにある。祠の前で手を合わせ山の神様にご挨拶した。

周りの山々を眺め、山の名前を確認する。八ケ岳、南アルプス、浅間山、両神山、遠くには槍ヶ岳も穂高も見えるではないか。下に見える村々も美しい。山々の眺めを堪能しながら、山に登れる幸せを想った。山岳会の皆

様ありがとうございました。

源氏山

臼田　昌美

山行日：令和６年11月４日（月・祝日）
地　図：「奈良田」「鰍沢」
行　程：道の駅富士川―源氏山登山口―分岐―源氏山―分岐―大峠山―分岐―登山口―道の駅富士
参加者：臼田昌美、北原孝浩、鶴田陽子、渡辺和美、松村明子、八木秀子

秋晴れの茶屋峠（１６９０メートル）、今日出会う「楓４種他」を覚えつつ歩き出す。

山葡萄の葉の先に、南アルプスの荒川岳、赤石岳、笊ヶ岳、笹山の稜線が美しい。登山道に入り、途中、ヤマモミジの大木は今夏の暑熱の影響か枯れ落ちていたが、地元組合の森林整備（斜面伐採）のおかげで、足元明るく、歩きやすい道と変化していた。

源氏山直下の急登を過ぎて、山梨百名山、源氏山１８２７メートルに到着した。一番の変化が、先に新設された「富士山展望所①」。山頂は「展望が望めない」と書かれた文章は、訂正必須。雄大な富士山に対面したのである。

休憩後、大峠山足馴峠分岐へ戻り、先程憩った源氏山と富士山が横並びの眺望ポイントベンチでひと休み。大峠山への道も整備が入り歩きやすいが、直下トラバース道は通行不可となっている。山頂手前で、秋晴れの青空の下に鳳凰三山・甲斐駒ヶ岳・八ヶ岳連峰が立ち並ぶ絶景眺望に思わず立ち止まり、撮影会。

さて山頂は、一等三角点「大峠１９０８メートル」が埋設されている。数年前の伐採で広々とした陽だまりになり、まったり昼食をとった後、こちらも新設の「富士山展望所②」へ。

秋晴れの源氏山

目の前にいきなり、富士川町全域と、富士川の流域を足元に従え裾野を大きく広げる巨大な富士山があらわれる。遠くの山並み、蛇行する川。

かつては「湯道」として多くの人達に歩かれた山道。時代の流れで、山の在り方は随分変わって来たけれど・・・。

午後の太陽光が紅葉を輝かせ、今日の源氏山、大峠山は鮮やかに明るくなった。

丹波天平（たばてんでいろ）

手崎 喜美子

山行日：令和6年11月24日(日)

地　図：昭文社「雲取山・両神山」

行　程：道の駅たばやま―サオラ峠―丹波天平―丹波小学校―道の駅たばやま

参加者：手崎喜美子、古屋寿隆、石澤貴子、荻原賢司

天平（でんでいろ）、聞き慣れない名称である。「平らな場所」と言う意味が有る様だ。丹波山村には、天平と名が付くピークが3箇所有り、その中の一つ丹波天平を訪れた。

集合場所の道の駅たばやまからは、暫くの間舗装路を歩き、フェンスに囲まれた畑の中の害獣柵を3回開けると九十九折の狭い登山道が始まる。休憩を3回取りつつゆっくり歩いて3時間程でサオラ峠（サヲウラ峠、竿裏峠との表記も有る）に着く。

ここからが今回の山行のハイライト。飛龍山へと続く広く緩やかな天平尾根を、落ち葉を鳴らしながら思い思いに歩く。1ヶ月早く訪れていればカラマツの黄葉が見頃だったのだろうな、と思いながら、開放感いっぱいの尾根道「歩くのが気持ち良い！」を楽しんだ。小ピークの「丹波天平」と2等3角点の写真を撮った後は、開けた場所でお昼休憩。その後、持参したボールを投げたり蹴ったりと子供の様に追いかけ、山登りよりも汗をかいた。コンパスを使った地図読みを教えて頂いたりもした。

童心に返って、山頂でのドッジボール

狭く滑り易い九十九折の道を下りながら、登山道と踏み跡の薄い尾根道どちらが早く着くのか？　二手に分か

れて検証しつつ、小学校のゲートを開け、1時間30分程で道の駅たばやまに戻って来た。

淡雪山・興因寺山・小松山

角田　元

山行日：令和6年12月7日（土）
地　図：2万5千図「甲府北部」
行　程：緑が丘スポーツ公園体育館駐車場集合―千代田湖畔駐車場―和田峠―塚原峠―金子峠―弥勒館―淡雪山―興因寺山―淡雪山―金子峠―車道―千代田湖畔駐車場―武田の杜駐車場―片山（武田の杜散策）―武田の杜駐車場解散
参加者：渡辺峯雄、小嶋数文、大澤純二、大澤さな枝、上田健治、角田　元

武田神社から北に上がっていくと興因寺という標識がある。標識になるくらいだから由緒あるお寺なのだろうと思いつつ、まだ行ったことは無い。今回、公募山行「興因寺山・淡雪山・小松山」ということで、参加したいと考えた。

緑が丘スポーツ公園から、千代田湖畔駐車場まで移動して車を置いた。そこから歩きで和田峠を渡って山道に入る。トレイルランで通過するらしい塚原峠を越えて金子峠に到着した。「きんすとうげ」と読むらしい。ここには、弥勒館という立派な建物がある。甲府の北方、平和観音の頭上付近で、夜になると赤や青の光を点滅させているところだろう。そこから淡雪山の登りだ。峠からしばらくの間は白い砂岩が続き、これが淡雪の語源なのだろう。淡雪山の頂上は普通の土で白くなかった。甲府名山の碑が立っていた。ここから急な斜面を真っ直ぐに下るのだが、踏み跡が落ち葉で深く埋まっていて油断すると滑って転びそうになる。一旦下ってすぐに興因寺山の登りとなるが、ここも急な斜面の直登だ。やはり踏み跡が落ち葉で埋まっていて危険だ。頂上方面から降りてきた人が、目の前で滑って転んでしまった。

興因寺山の頂上付近には鉄塔が立っていて風情は今一歩だった。ここにも甲府

紅葉の見納め

名山の碑が立っていた。10数年前までは南側に富士山がよく見えたらしいのだが、現在は木が生えていて富士山は直接は見えない。木を一本切ってもらうと良いんじゃないか、というような話が出た。頂上からは来た道を歩いて淡雪山を過ぎて白い砂岩の見晴らしの良いところで昼食とした。昼食後は金子峠から小松山に向かう予定であったが、予定を変更して片山方面の紅葉を見に行った。

千代田湖畔駐車場まで車道を歩き、武田の杜駐車場まで移動して、紅葉を見ながら片山（武田の杜）を散策した。時期的にはやや遅かったが素晴らしい紅葉だった。

武田の杜駐車場で解散となった。

浜石岳

岩間　明子

山行日：令和7年1月11日（土）

地　図：2万5千図「薩埵峠」「浜石岳」

行　程：富士クラフトパーク第2駐車場―浜石岳入口―浜石岳―分岐―浜石岳入口―富士クラフトパーク第2駐車場

参加者：磯野澄也、平松清子、相川修、臼田まさみ、遠藤辰也、末木佐登子、高橋みゆき、渡辺和美、岩間明子、保坂美佐子、山本かほる、福島繁美、講師・上田憲弘

「山頂にて新春を祝い、寿司とお餅パーティー」のうたい文句に魅かれ、今回の山行に参加させていただいた。5時30分、自宅を出発する。マイナス7度、身を切るような寒さの中、待ち合わせ場所に集合した。車3台に分乗して浜石岳登山口駐車場へ。今回は白鳳会の植田さんを講師に招き、シダ食物の見分け方や特徴などを学びながら、標高差６００メートルほどの浜石岳山頂を目指す。

途中までは舗装道路を歩く。みかん畑を縫って進むと、山々の間から、きらきら輝く駿河湾と富士山が望める。何度も後ろを振り返り足が止まってしまう絶景だ。舗装道路から三本松方面へ進む。本格的な登山道に入る。急に勾配がきつめの道を登っていく。危険な個所はないが、腰の高さまで土壌が削られた箇所があった。見晴らしの利かない深い林を進む。野外活動センターの三本松広場に出ると視界が開け、駿河湾と富士山の眺望が望めた。ここで小休憩をとる。

三本松広場からは40分程で山頂になるが、シダの学習にも余念がない。浜石岳にはざっと40種類ほどのシダが

自生していると教えていただいた。色の少ない冬の登山ではシダの観察も楽しみの一つになると感じた。

薩埵峠の分岐まで来ると、頂上まではあと少し。緩やかな坂を登っていくと山頂だ。山頂はとても広く３６０度視界が開け、富士山、駿河湾、伊豆半島、遠く南アルプスの白い峰々も見渡せた。大勢の登山者で賑わっており、その中に、ひときわ目立っていたのが、今回のＳＬの方が先回りして用意してくれていた、大きなレジャーシートの上に並べられたご馳走の数々だった。お寿司に漬物、みそ汁、フルーツ、スイーツ、とても山頂とは思えない豪華さ。シャンメリーで乾杯し、新春を祝うパーティーが始まった。今回のＣＬがお米から作ったというお餅も焼いてくれた。手厚い気配りに感激した。「参加して良かった」「次はサバ寿司をお願いします」などと、皆さんとてもいい笑顔で楽しまれていた。

富士山と駿河湾と青空と

下山のコースは入山者が少ないのか、崩落している箇所や、背丈以上もある藪道を転ばないように慎重に歩く。山頂から3時間かけ、緊張する場面もあったが、無事に下山することができた。

私にとっては２０２５年の初山行。今年はどんな経験が待っているか幸先の良い山行となった。

宝登山（ほどさん）

平松　清子

山行日：令和７年２月２日（日）
地　図：２万５千図「鬼石」
行　程：宝登神社参道駐車場―氷池―宝登山―駐車場
参加者：手崎喜美子、荻原賢治、遠藤辰也、平松清子

早春の太陽の光を浴びて、透きとおるような淡い黄色の花を咲かせる蝋梅（ロウバイ）。標高４９７メートルの宝登山頂に、約８００株（３０００本）もの蝋梅が咲くそうです。英名は、ウィンタースウィートと呼ばれるほどの濃厚な甘い香りに包まれます。その花を求めて、宝

登山へ。

宝登山は雪予報。蝋梅と雪景色が見られるかなってワクワクしながら行きました。笹子峠で雪になり上野原から八王子経由で長瀞までの間は、ポツポツの雨。宝登神社参道駐車場に車を置き、氷池で天然の氷作りを見て宝登山へ。

宝登山山頂が近くなると登山道に雪が現れ、蝋梅と雪景色を想像しながらワクワク感が止まりませんでした。山頂では、雪をかぶった蝋梅や福寿草や梅の花も見る事が出来ました。

節分の山頂

下山後、近くの食堂でお昼。わらじカツと味噌豚丼でお腹がいっぱいに。帰りに立ち寄った、こんにゃく直売所の試食は、いろんな種類があって食べるのが楽しかったです。

節分の日だったので、山頂で鬼のお面をつけてパチリと写真を撮りました。

公益・共益事業

第10回「やまなし登山基礎講座」

矢﨑　茂男

やまなし登山基礎講座を、9月から10月にかけて開催した。10年間実施した「山の博覧会」に続く事業として取り組んできた本講座も、10回を数えるに至った（第7回は中止）。今回も、会員各位の協力により無事に終了することができたことに感謝する。

4月・5月の理事会で実施要項を検討し、開催までの作業工程、講座内容、会場、講師、チラシ作成、周知方法などを確認した。受講者募集については、各市町の図書館等の公共施設等へのチラシ設置依頼、ホームページ・SNSでの情報提供など、あらゆる手段を駆使して周知を図った。その結、開講条件下限の受講者数10人の受講生が集まった（前回13人、前々回14人）。山梨学院の支援がなくなり、受講生確保は今回も困難だった。

講座は、従来同様の内容を設定。初心者を対象に登山の基礎的知識・技術を講義するとともに、登山に伴う危険回避について講座全体を通じて指導した。また、日本山岳会の活動理念である山の文化的側面の啓発のため、

登山史や山岳文学、山岳写真等の講座も設けた。

実践登山は２回実施。第１回は茅ヶ岳山麓で、地図読み・ロープワーク・セルフレスキューを指導した。第２回は高川山に登頂し、地図読み・山岳写真などを含めた総合登山を実施した。いずれも真剣な実践登山講習であったとともに、受講者どうし、受講者と支部員の親睦を深める実り多い実践講座だった。

平成27年に第１回を開催するに当たり、「10回の実施を目標とする」との方針が立てられた。したがって、今回は節目の位置付けによる開催だった。実質９回の講座に参加した受講者はおよそ２００人。この中には、講座後入会した方も少なくない。大きな成果を上げた事業だといえるだろう。今後の事業方針については、会員からの意見を踏まえ、理事会で検討することになる。有意義かつ過剰負担にならない取り組みを模索したい。

熱心に聞き入る受講者

【アンケート結果】　回答者10人

１　受講生の構成など

（１）性別　男性：２人　女性：８人

（２）年齢　20歳代：１人　50歳代：２人
60歳代：４人　70歳代：３人

（３）山岳会加入状況　入っている：５人
入っていない：５人

（４）登山の形態
単独登山が多い：２人
グループでの登山が多い：７人
単独・グループ同じくらい：１人

（５）登山歴
３年未満：７人　４～９年：２人
20年以上：１人

２　講座内容について

（１）講座全体　大変役に立った：５人
役に立った：４人　普通：１人

（２）講座のレベル　ちょうどよい：10人

（３）講義の内容　よい：８人
登山知識・技能・実践のみでよい

：２人

（４）講座日数・回数　今回程度でよい：５人
もっと多くてよい：５人

（５）１回あたりの講座時間
今回程度でよい：９人
もっと長くてよい：１人

（６）実践登山　今回程度でよい：５人
増やしてほしい：５人

（７）ロープワーク、セルフレスキュー
役に立った：３人
もっと時間をかけて学びたい：６人
興味・関心がある：１人

（８）来年度、この講座を実施する場合について
再度受講したい：３人
受講の考えはない：４人
分からない：３人

（９）「再度受講したい」理由は何ですか
さらに上の知識・技術を学びたい：３人

３　講座の周知

（１）この講座をどのような方法・手段で知ったか
ホームページを見て：１人
図書館などでチラシを見て：１人
人から聞いて：６人
新聞記事を読んで：１人
その他：１人

４　日本山岳会について

（１）関心の有無　ある：５人　ない：１人
どちらともいえない：４人

（２）入会について
前向きに考えたい：３人
分からない：７人

（３）山梨支部で実施する山行などへの参加
参加したい：１人
内容によっては参加したい：９人

６　講座についての自由記述

・年齢、体力を考えながら、山との関わりを続けていきたいと思うことができた。
・登山の楽しさと同時に危険についても認識を新たにできた。
・ロープワークやセルフレスキューなど、テーマを絞った内容の講座を行ってほしい。

・初心者には、より細かで時間をかけた指導（ロープワーク等）が必要だと思う。
・地図の読み方、負傷時の応急処置などが勉強になった。
・スノーシュー、テレマークスキーの講習なども開いてほしい。
・年齢と体力に合った山から少しずつチャレンジしていきたい。

7 経年アンケート集計からの考察

・受講者数が減少した。広報の仕方・講座内容、需要の頭打ちなど原因はいくつか考えられるものの特定はできない。
・40歳代がいなくなり、50歳台から70歳台が9割を占めた。
・20歳代の受講生が1名いたが、積極的な受講態度ではなかった。望んでいた内容との乖離か。
・受講者の登山歴は9年以下が大半を占めており、「基礎講座」の対象としてふさわしい。
・講座の内容について、有益性・レベル・内容・日数・時間など、概ね適切であった。
・実践登山について、回数を増やしてほしいとの意見が少なくなかった。ロープワークの有益性が支持された。
・再度受講したいと回答している受講者は、さらに上の知識・技術を学びたいと回答している。
・講座の周知について、チラシの効果が低い結果が見て取れるが、チラシやホームページから所謂口コミで広がったと考えることもできる。
・日本山岳会への関心・入会意思・支部行事への参加意思は高まってきている。

第7回「田部祭」

矢﨑　茂男

新緑まばゆい昭和の日、第7回田部祭が山梨県山梨市三富で開催された。昨年から田部祭は、西沢渓谷山開き・山岳指導所開所式と同じ4月29日に行うことになったが、山開き・開所式の後、別途旧西沢山荘前の田部重治文学碑前に移動して開催されたので、二つの催事の間には、やや長い待ち時間が挟まれた。今年はこれら3つを併せて行うことになったため、毎年実施している西沢渓谷記念ハイキングの時間にゆとりが生まれた。これらは、

山梨支部の要望を主催者側が受け入れてくださったために実現した。

西沢渓谷入り口バス停先の広場で執り行われた式典には大勢の登山者が参列し、熱心に見入っている姿が印象的だった。主催者である山梨市観光協会三富支部の雨宮支部長から、田部重治への敬意を込めたあいさつがあった。田部らは大正４年から３年続けて東沢に挑み、３年目に釜ノ沢を遡って甲武信岳に到達。この間、東沢に展開する渓谷美に驚嘆し、心酔し、遡行記を毎回したためたこと、これらの紀行や「金峰山より雁坂峠まで」などの著述を通して、奥秩父の魅力、分けても類まれな渓谷の美しさについて詳述したことなど、短時間ではあったが、田部の貴重な事績が解説された。

次に、同じく主催者である日下部警察署の加藤署長から、多くの入山者を迎える西沢渓谷では、事故も少なからず発生していることが報告され、事故防止と迅速な救助のために、日下部署及び山岳救助隊は全力を挙げて取り組む決意が述べられた。

来賓による献花に続いて、本部「引き継がれる山岳祭」の坂井プロジェクトリーダーが献酒。続いて山開きの式典に移り、地元・大嶽山那賀都神社の日原宮司による神事が執り行われた。祝詞では、今シーズンの登山者の安全を祈願するとともに、田部の作品の一節が紹介され、今日の笛吹川源流域の隆盛の礎を築いた田部の功績が奏上された。

この後、高木山梨市長が祝辞を述べた。式典前に坂井プロジェクトリーダーが「引き継ごう山岳祭（２０２４年版）」パンフレットをもとに、全国で開催されている[13]の山岳祭のこと、そのうちの三つ（深田祭・田部祭・木暮祭）が山梨県にあること、深田祭・木暮祭も所在地の自治体が山岳観光の拠点となるべく尽力していることなどを市長に説明したところ、市長はそのことを初めて知った様子でしきりにメモを取っていた。祝辞では、そのパンフレットを手に山岳祭と田部祭を紹介しながら、西沢渓谷が富士山に勝るとも劣らない優れた山岳景観を

田部重治文学碑を囲んで

持つ自然遺産であることを紹介した。

最後に、登山道に張られた蔓を市長らが斧をふるって切りとる入剣の儀が行われ、式典は終了。登山者が続々と、西沢・東沢に向かっていった。

山梨支部の参加者は、一足遅れて出発した。田部重治文学碑に着いて荷を下ろし、例年同様、献花を行い記念写真を撮った。今回の式典の形態は、大変効率的で多くの参列者を得ることができた。また、雨宮支部長のあいさつ、日原宮司の祝詞などに細やかなご配慮があった。今後とも田部祭を継承し発展させていくために、協賛団体として積極的な協力を行ってまいりたい。

第5回「子どもと登山」

北原　孝浩

山梨県山岳連盟と共催して、山の日記念の「子どもと登山」を令和6年8月10日、飯盛山（めしもりやま、1643m、長野県南牧村）で実施した。このイベントは5回目になる。従前「家族登山」と称していたが、今回「子どもと登山」と呼称変更をした。山梨県の「令和6年度やまなしで過ごす『山の日』関連イベント」としての行事としても定着しつつある。

公募した参加者27名（9組、子ども15名、保護者等12名）にスタッフ15名（内、看護師1名）を加え、総勢42名により盛大に実施した。

飯盛山は、山梨県（北杜市清里）と長野県との県境近くの山で季節を問わず登山者やハイカーに人気の山である。山名の由来は頂上部分がご飯を盛ったような形をしているからだと言われる。

朝9時に野辺山高原平沢峠の獅子岩駐車場に集合。準備体操のあと全員で記念撮影をし、3グループに分かれて登山を開始した。2度の大休憩の都度水分補給をし、時折快い涼しい風が吹く中を進んで、飯盛山に登頂した。山頂直下の小広場で昼食後、大盛山（1650メートル）の展望台で360度の景色を楽しみ、往路を引き返した。道すがら、子どもたちに山道の歩き

夏休みの素敵な思い出

方や山の花の名前、遠くに見える山名などを説明した。
陽射しは強かったもののそよ風が吹き抜け、マツムシソウやアサマフウロ、コオニユリ、アザミなどが咲き乱れ、眼前には八ケ岳連峰、南アルプス北部の山々、近くには茅ケ岳、男山や天狗山、奥秩父の山並みなど素晴らしい眺望が広がっていた。
スタート地点に下山後、プチクライミング組と植物観察組に分かれてのひとときを楽しんだ。獅子岩では、恐る恐る岩に手をかけながら登る子どもや進んで二度三度興じる子どももいて、みな大喜びだった。
締めくくりは、JR小海線野辺山駅近くのポッポ牛乳でおなじみのヤツレン工場売店でソフトクリームを参加者全員でいただいて、午後3時に散会した。

第65回「木暮祭」

石澤　貴子

第65回「奥秩父の父」をたたえる木暮祭が10月19日・20日、木暮碑委員会により開催された。5年ごとの開催年は大々的な記念祭だ。本年は共催した山梨県山岳連盟の総合研修会、前夜祭へと続く流れだった。
19日17時、みずがき山リーゼンヒュッテ講堂にて、北杜市上村英司市長が、木暮理太郎と、自身が初めて登った金峰山について語られた。続いて矢﨑茂男理事が「木暮理太郎と大島亮吉」と題して講演。「木暮と大島、宮沢賢治は山を通じてつながっている。とくに奥秩父」という言葉が会場に余韻を残した。
18時半から前夜祭。主催者挨拶として山梨岳連小宮山稔会長、古屋寿隆支部長が、ご参加の皆様へ謝辞を述べた。来賓のご挨拶を日本山岳会橋本しをり会長、理太郎生誕の地・群馬県太田市の「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」浅海崇夫事務局長から頂戴した。続いて来賓のご紹介、乾杯から宴席が始まり、前夜祭締め括りは橋本会長と東条理事による「岳人の歌」の合唱だった。
翌20日、朝8時からの記念登山は、甲斐百山に選定されている「魔子の山」へ。途中稜線からは、12歳の木暮理太郎に「紙鳶の糸を巻くことさえ忘れて怪しくも山に魅入られ（中略）愛する外に仕方なかった」（『山の憶ひ出』）と言わしめるほどの山、金峰山が見えた。
14時より、金山平にて第65回木暮祭碑前祭を執り行った。献酒、献花、主催者挨拶、来賓挨拶、とプログラムが進行した。

「国内外の自然の探求に力を注いだ木暮先生の精神を引き継ぎたい」との橋本会長の言葉は、背筋の伸びる思いがした。また、浅海事務局長が紹介された木暮理太郎年譜は「いつまでたっても未定稿」なのだそう。その理由が印象的だった。献杯の後「近代、金峰山に登った人たちと紀行文」と題した内藤順造氏による講話を聞き、皆で静かに理太郎翁を偲んだ。閉会の言葉、碑を囲む集合写真、碑前祭は幕を閉じた。

秋の日こぼれる木暮碑

15時から恒例の「ほうとう食う会」。これは地元観光協会による、嬉しいおふるまいだ。ご参加ご協力していただいた皆様に感謝申し上げ、木暮理太郎翁の功績の顕彰、永続的な山岳祭の継承を旗幟鮮明にし、また皆様とお会いできることを期待したい。

第11回「中部ブロック4支部交流会」

大澤　純二

越後・信濃・山梨・静岡で構成される中部ブロック4支部交流会が、11月16日、17日の2日間、山梨支部主催で八ヶ岳南麓清里高原清泉寮において開催された。清泉寮は景勝の地にあり、南に世界文化遺産の富士山、東に甲武信ユネスコエコパークの金峰山・瑞牆山など、西に南アルプスユネスコエコパークの甲斐駒ヶ岳・北岳・鳳凰山、北に八ヶ岳連峰を望むことができる。越後支部4名、信濃支部8名、山梨支部21名、静岡支部9名、総数42名が参加した。4支部の活動報告、記念講演、懇親会、記念登山と、充実した2日間の交流会となった。

16日13時40分、交流会が始まった。山梨支部小宮山稔監事（山梨県山岳連盟会長）の歓迎のあいさつ、古屋寿隆支部長の主催者あいさつの後、各支部の年間活動報告が行われた。

各支部の国内外の登山活動、登山講習会、山岳祭などの明るい報告があったほか、共通する話題は、各支部会員の高齢化、会員数の自然減と新入会員の獲得の難しさなどの悩ましい話。山梨支部では過去10年間初心者向け登山基礎講座を開催し、それが新会員獲得の重要な位置

づけになっていること、またオンライン会議では無料ZOOMよりLINEの方が使い勝手が良いなど、貴重な情報交換の場になったと思われる。

その後の記念講演会では、山梨支部矢﨑茂男理事による「古屋五郎―山と人を愛した男―」と題した講演があった。あまり世に知られていない、明治43年（１９１０）甲斐駒ヶ岳の麓に生まれ育った古屋五郎の人となり、南アルプス国立公園制定に向けた活動などが紹介された。

18時30分、懇親会が始まった。各支部の交流が深まるようにと、参加者はそれぞれ指定のテーブルに着いた。歓談の後、各支部の自己紹介などで交流した後、二次会会場に移動し、22時30分まで懇親を深めた。

記念登山出発の前に　–清泉寮玄関にて–

16日の曇天、夜の雨と打って変わって翌17日は晴天、この時期にしては気温の高い一日となった。記念登山グループは３班に分かれ、八ヶ岳横断歩道(※)に向かった。一部の参加者は、清泉寮周辺の散策とポールラッシュ記念館見学で過ごした。

登山グループは車に分乗し、八ヶ岳横断歩道の入り口、美し森駐車場に向かった。8時30分登山開始。美し森までの木道から富士山、奥秩父、南アルプスの大パノラマを楽しんだ。羽衣の池まではややきつい登りではあるが、その後は穏やかな登山道が続いた。途中川俣川東沢を渡渉したのち、県営八ヶ岳牧場の草原に出る。草原を横断し、展望見晴台で富士山や南アルプスの景色を楽しんだのち下山、八ヶ岳横断道路に出た。歩道を行き東沢大橋で八ヶ岳主峰赤岳と紅葉を楽しんだ後、12時、清泉寮に戻った。解散のあいさつの後、清泉寮前の広場で三々五々、準備されていたお弁当で昼食をとり、帰路に就いた。

次回の４支部交流会は、静岡支部主催で令和７年10月４日～５日、伊豆で開催される予定である。

※【八ヶ岳横断歩道】真教寺尾根経由赤岳登山口の美し森から編笠山登山口の観音平を結ぶ遊歩道。記念登山ではその一部を歩いた。

報告・エッセイ

ＪＡＦＰＡ設立35周年記念シンポジウムを開催して

ＪＡＦＰＡ本部長　中村　光吉

日本高山植物保護協会（ＪＡＦＰＡ）設立35周年記念シンポジウムを、令和６年10月27日、山梨県立文学館で開催した。「山の現状を知り植物に関心をもって希少種保護と植生改善を実践する」をテーマに１２０名が集った。岩科司会長が主催者挨拶の中で、現在の高山植物の置かれた状況や危機的な自然界の実情について警鐘を鳴らし、会が始まった。

午前の部は、まず筑波実験植物園の遊川知久博士が、植物園の多様性保全について講演。日本は地球上36カ所しか無い生物多様性ホットスポットの一つ。しかし維管束植物は約７０００の種類が自生しているが、その四分の一が絶滅危惧になっている。開発や温暖化などにより現地の環境もどんどん悪くなる危機的な状況の中、植物園は大切な役割を担ってる。２０３０年までに１４００種の絶滅危惧種を保全する事を目指して活動していく、などの内容が解説された。

続いて、東京大学の池田啓氏が、高山植物がいつどのように日本に入り定着したのかについて講演した。２６０万年前以降、北方から入りその後日本に定着というのが通説だったが、ＤＮＡ解析で、エゾノコザクラなど日本から北上し、北米に分布を広げた種もある事が解明されたことなど、興味深い内容が語られた。

午後の部では葦毛湿原や小笠山、利根沼田、玉原高原、乙女高原等の保護団体による活動の報告。第三部では筆者が三つ峠での鹿の増大に関わる対策について報告した。三つ峠山頂付近の鹿柵以外の草地の裸地化、毒草のヤマトリカブトの群落化、子鹿のやむを得ない毒草食による死亡例、これを餌にすることによる熊の肉食化、ナラ枯れの進行によるドングリの減少と熊の市街地への出没事案の多発などについて発表した。

その後、鵜飼一博副会長による南アルプスに設置した鹿柵の効果の報告、パネルディスカッションでの山梨県の自然保護担当を長く務めた小俣慈さんによる、今後の活動展望等が発表された。

以前から協会の会長と親交がある秋篠宮皇嗣妃殿下紀子様も当協会の活動にご関心持たれ、シンポジウムの最初から最後までご聴講になり、休息時間に発表者の皆さ

んとご懇談された。
35年間、各地で地道に観察会を行い、故白旗史郎会長は高山植物の美しさや価値を様々な機会で伝えてきた。
１９８５年の山梨県高山植物保護条例に始まる全国の条例制定に基づく保護活動に尽力してきた当協会は、若い方々に、この活動を思想として伝え続ける必要を感じている。これを読まれた方々に、少しでもこの思いが伝われば と思う。

貝伏山里山水源の森復元事業

大澤　純二

駿河と甲州の国境の駿河寄り、静岡市清水区西里地区・興津川源流域に貝伏（かいぶし）という隠れ里がある。甲斐武士の意味である。武田が滅亡したのち、臣下がこの地に遁れ土着したと伝わる。
この度、貝伏山の麓での植樹事業がＮＰＯ静岡山の文化交流センターによって計画された。山梨にもゆかりのある土地ということで、ＮＰＯ代表の山本良三さん（ＪＡＣ静岡支部所属）からボランティア参加の声がかかった。山梨支部と岳連自然保護委員会で参加募集したところ、６名の参加者があった。

令和６年５月11日（土）９時、西里温泉駐車場に静岡支部の５名を含め20数名が集合し、植樹地貝伏山麓に向かった。植樹地は杉伐採跡の放棄地で、今回の植樹前に獣害防止ネットで囲まれていた。急傾斜地で、タケノコ掘り鍬を使って穴を掘り、広葉樹苗７９０本を移植した。樹種は、本来この土地に土着していたと考えられるスダジイ、タブノキ、いろいろなカシの木などだった。晴天で気温が高い大汗の作業だったが、２時間ほどで終わり、解散した。
山梨からの参加者は、武田信玄ゆかりの田代峠が遠望できる所や、１７０年ほど前の安政元年の大地震で山から転げ落ちてきたという大岩を案内していただいた。
その後、西里温泉やませみの湯に浸った。露天風呂などゆったりとした秘境のいいお湯だった。昼食をここで頂き、山梨グループも解散した。
【山梨県の参加者：中村光吉、平松清子、遠

急斜地での移植作業

藤達也、市川俊行、大澤さな枝、大澤純二】

特別な第65回木暮祭

北原　孝浩

日本山岳会第3代会長であった故木暮理太郎氏（以下、木暮と表記）は１９４４年（昭和19年）５月７日、71歳で逝去された。木暮は奥秩父の山をこよなく愛し、奥秩父を登山の対象として世に広く紹介したことで『奥秩父の父』とか『奥秩父の命名者』とか言われている。彼の遺徳を偲ぶ碑前祭「木暮祭」が北杜市須玉町の金山平で開催された。

今年は節目の65回目。第50回から5年ごとに行ってきた前夜祭が北杜市須玉町のリーゼンヒュッテで盛大に開催された。日本山岳会の会長が木暮祭に参加するのは第1回以来64年ぶりのことである。今回橋本しをり会長に参加いただいたという山梨支部の長年の念願かなった記念すべき特別な木暮祭。共催者の山梨県山岳連盟も総合研修会（外岩体験会とヒュッテ講堂での山梨県制定、山梨百名山ピッチマップ学習）を実施し、盛り上がった第65回木暮祭であった。

日本山岳会が関わる山岳祭は全国で14を数える。２０２４年基準でウエストン祭は77回、高頭祭は74回で木暮祭は65回という3番目に長い歴史ある山岳祭である。木暮祭は木暮碑委員会（増富ラジウム峡観光協会、山梨県山岳連盟、日本山岳会山梨支部で構成され、日本山岳会山梨支部が運営事務局）が主催している。

山梨支部では本会入会歴の浅い支部員が増えていることなどを考え、木暮祭についてあらためて記してみた。登山史でいう秩父時代を築いた木暮の遺徳と精神を、われわれは後世に語り継いで行く責務があると考えるからである。前夜祭や木暮祭における本会橋本会長の挨拶や前夜祭での矢﨑会員の特別記念講演、および木暮祭式典後の内藤順造顧問の講話についても、その要旨を記述した。石澤支部員の報告との重複もあるが、ご容赦いただきたい。

2つの碑前祭　「木暮祭」と「木暮碑前懇親会」

木暮の七回忌に当たる１９５１年（昭和26年）５月６日に木暮が活動の中心になっていた「霧の旅会」など木暮ゆかりの人たち（日本山岳会、山梨県山岳連盟、石楠花山岳会、日本山岳会山梨支部などの有志たち）が現在の顕彰碑より２００ｍほど高い場所の岩に木暮のレリーフ（佐藤久一朗作）を埋め込み除幕式を行った。以後木暮の命日の5月に参拝をしていた。このレリーフの近くには日本山岳会松方三郎第5代会長（後に第10代会長にも就任）書の木暮翁讃辞（白ペンキ塗りの幅1メート

ル、縦70～80センチほど）の立派な説明板が設置されたと記録にあるが現存せず（後述の台風禍で消失と考えられる）。

１９５９年（昭和34年）９月の「伊勢湾台風」に因ってこのレリーフ一帯が無残な姿に一変した。日高信六郎日本山岳会第９代会長は早速同年10月に現地を訪れ、台風による被害状況を確認し、日本山岳会が中心になって石楠花山岳会、霧の旅会、山梨県山岳連盟、日本山岳会山梨支部、増富ラジウム峡観光協会、須玉町観光協会が木暮碑委員会を組織して寄付集めや碑設置場所探し、碑作成など再建に着手した。その結果木暮碑は翌１９６０年（昭和35年）10月現在地に完成した。新しい木暮碑の除幕を兼ねて第１回の木暮祭を10月８日～９日に開催した。除幕は木暮の長女木暮美枝子さんの手で行われ、詩人尾崎喜八が木暮を称える詩を朗読するなど２００人余の山岳関係者が集まった盛大な木暮祭の幕開けであった。爾後木暮祭は毎年10月の第３日曜日に開催されてきた。

木暮碑は大谷石の堅固なもので重量は２トン余、当時車が入れる道路は落合（現リーゼンヒュッテの先、金山集落と木賊峠方面への分岐）までで、これから約３キロメートル先の有井館のある金山集落まで、さらに現木暮碑の場所まで地元観光協会員全員が人力で運び持ち上げて設置したという超大変な作業であった。

一方木暮の十三回忌に当たる１９５６年（昭和31年）から木暮ゆかりの人々が毎年５月に木暮碑を訪ね、金山の有井館に集まって「木暮碑前懇親会」を開催してきた。これには日本山岳会本部や山梨支部の関係者も参加してきたが、懇親会の中心的存在の山村正光（日本山岳会員）の逝去や参加者の高齢化などによって開催が滞り（２００２年開催を最後に自然消滅状態）、２００５年山梨支部は木暮碑前における行事は毎年10月第３日曜日開催する木暮祭のみに決定した（碑前祭の一本化）。

第65回木暮祭前夜祭（10月19日）

前夜祭恒例の記念講演は矢﨑茂男会員が演題『木暮理太郎と大島亮吉』で講演した。木暮理太郎と大島亮吉、あるいは宮沢賢治と関連づけされた切り口での話は初めて聴き、新鮮かつ興味ある話であった。講演要旨は次の通り。

記念講演

不世出の登山家大島亮吉は28歳で前穂高岳において墜死したが、執筆活動でも台頭し注目されていた。彼と木暮の接点は１９２５年（大正14年）のことである。槇有恒（日本山岳会第５代会長）を介して知り合い、当時『山岳』の原稿不足に悩んでいた木暮が大島亮吉に寄稿を依頼した。大島の作品には

豊かな感性にじむ名作が多く今も読み継がれているが、その表現には宮沢賢治の影響が認められるとの指摘がある。賢治の『春と修羅』『注文の多い料理店』（ともに大正13年刊行）中の記述との類似が少なからず確認できるからである。

一方木暮と宮沢賢治との関係は不明ではあるが、賢治は山や自然が好きであったので、木暮や田部重治の静観的な登山スタイルや記述に惹かれていたのではないかと研究者が指摘している。賢治の文学に木暮が影響を与えたことは想像に難くない。四者は互いに強く結ばれていると言えよう。

私は木暮、大島、賢治、田部の諸氏は「奥秩父の山」を通じて見えぬ糸で固く繋がっているものと感じた。

講演後、食堂において懇親会が行われた。この中で、日本山岳会橋本しをり第27代会長から、主催者への謝意とともに、次のような挨拶をいただいた。

橋本会長挨拶（要旨）

木暮理太郎先生は「奥秩父の父」として、秩父の山々を中心に日本の登山界に多大な影響を与えました。先生の登山活動や研究は日本国内にとどまらず、国際的な視野を持つものでありました。先生が熱中された「東京から見える山々」という独自の研究は、地域の自然と都市の繋がりに対する深い理解を示すものであり、晩年にはヒマラヤや中央アジアの山々の研究にも力を注がれるなど、常にグローバルな視点を持ち続けていました。

日本山岳会も木暮先生の遺志を受け継ぎ、国内外の登山者との交流を促進し海外登山隊の支援や国際的な協力を進めてきました。来年、日本山岳会は創立１２０周年を迎えます。木暮先生をはじめとする先人たちの足跡を振り返りながら、これからも国内外に向けた登山活動を推進していくことを目指します。この前夜祭が、明日の木暮祭に向けて皆さまの思いを一つにする機会となることを願っています。木暮先生の偉大な功績に深く敬意を表し、今後もその精神を受け継いでいきたいと思います。

第65回木暮祭（10月20日）

天候に恵まれて恒例の木暮祭山行を、金山集落の北西の山「魔子」（標高１７００ｍ）で実施した。そして午後2時から第65回木暮祭式典が木暮碑前で開始され、山岳会関係者による献酒、献花が行われ、次いで主催者代表の挨拶、来賓（日本山岳会橋本しをり会長、木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会浅海崇天事務局長）挨拶の後、参加者全員で献杯をして式典が終わった。その後木暮祭恒例の講話として内藤順造山梨県山岳連盟及び日本山岳会山梨支部顧問が『近代、金峰山に登った人たちと紀行

文』をテーマに話された。3時からは金山山荘キャンプ場に移動して地元増富ラジウム峡観光協会による「ほうとう食う会」でキノコほうとうを馳走になり、第65回木暮祭はつつがなく終了した。

橋本会長挨拶（要旨）

本日は第65回木暮祭、この特別な日に参加できましたことを大変光栄に思うと共に感謝しています。

木暮理太郎先生は日本山岳会の第3代会長として、日本の登山文化に多大な貢献をされました。その功績は「奥秩父の父」として秩父の山々を愛し、多くの登山者にその魅力を伝えただけでなく、国の内外の自然を深く探求し、山岳文化に対しても豊かな視野を私たちに示してくださり、国際的な交流にもご尽力されました。

挨拶する橋本会長

私たち日本山岳会は木暮先生のこの精神を受け継ぎ、これまでも国の内外の登山者とともに登山文化を発展させてきました。来年、日本山岳会は創立120周年を迎えます。これまでの歴史を振り返りつつ、木暮先生が築かれた基盤をもとにさらなる発展を目指す決意でいます。

本日の記念登山を通じて皆さまも木暮先生が愛した山々に触れ、その精神と情熱を共有できたことと思います。この木暮祭を通じて木暮先生の遺産を次の世代へと引き継ぎ、私たちが国の内外での登山文化のさらなる発展に向けて行く気持ちを新たにしたいと思います。

最後に、この素晴らしい木暮祭を開催された増富ラジウム峡観光協会、山梨県山岳連盟、日本山岳会山梨支部の皆さまに心からお礼申し上げます。

講和（要旨）

木暮祭式典後恒例の講話は内藤順造山梨県山岳連盟及び日本山岳会山梨支部顧問が『近代、金峰山に登った人たちと紀行文』をテーマに話された。

古来信仰の山金峰山には数多の修験者が登ってはいたが、修行「峰入り」故、記録はおろかの紀行文など記述は無い。金峰山登拝が大衆化した江戸時代の記録については『甲斐国志』（1814年・文化11年編纂）に金峰山の登拝路10口の記述はあるが、近・現代のごとき紀文は全く見当たらない。その後、

御岳新道が１８４３年（天保14年）に開拓されて、文人墨客や薬草研究で金峰山を目指す者が紀行文をわずかに残してはいる。

明治時代になって、外国人（旅行者や宣教師）の影響で山岳信仰とは関係なく純粋な登山に行く者が現れた。日本山岳会初代会長小島烏水は、日本山岳会機関紙『山岳』に山の紀行文を多数掲載している。江戸時代末期から明治にかけて英国の外交官アーネスト・サトウ（日本山岳会第6代会長武田久吉の父）が明治14年に金峰山に登ったことを『サトウ日記』の「金峰山登頂と間ノ岳初登頂」の項に記述している。甲府は彼にとってお気に入りの地で、度々訪れていた。

講話では木暮理太郎、原全教、松浦武四郎、栗本鋤雲、田部重治、ウオルター・ウエストンやアーネスト・サトウの足跡と沢山の記述本について詳細な説明が行われた。私は興味ある未読の本が沢山あるのを知った。なお、各本の紹介などは割愛させていただいた。

藤田さんの情熱と勇気

矢﨑　茂男

藤田紳一さんは、共同通信の元記者である。登山ガイド・気象予報士の資格を取得したのち、50代半ばの２０２０年に退職して、筑波大大学院に入学。山岳を総合的に学ぶ課程に籍を置いた。２０２２年4月に北杜市へ移住。ここを拠点に登山ガイドの活動を始めた。藤田さんの転身に際して背中を押したのは奥様の恭子さんだという。みずほ銀行に勤務していたが、ご主人の思いをかなえるために退職して一緒に移住した。

この20年ほどの間、北杜市には日本中から登山ガイドが集まって来て、在住者は現在、相当な数になる。国内外に名の知られた登山家、岩や沢を専門にするクライマー、山岳文化に精通した岳人など、その経歴や個性は多様である。北杜市に多くのガイドが移住するようになったのは、周囲に名峰が櫛比し、様々な特徴を有する山に適応できるガイドの依頼が多いことが理由なのだろう。藤田さんご夫妻も移住先を探し求めた結果、北杜市に強く惹かれたという。

藤田さんはかつて、共同通信甲府支局に勤務していた。この時期、甲府昭和山岳会に所属して仲間と山行を重ね

たという。古屋支部長・磯野副支部長とはその時からの付き合いだそうだ。第10回やまなし登山基礎講座2日目の「地図読み」の講師を、磯野副支部長の推挙によって藤田さんにお願いした。藤田さんの専門性が遺憾なく発揮されるところだったが、登山初心者の受講者には、やや難解な内容だった。藤田さんが机間巡視をして個々の指導に苦慮する姿が目に焼き付いている。この事態を招いた責任は、登山講座担当者だった筆者にある。事前打ち合わせを行い、受講者のレベルに適した内容を精選して講義してもらう段取りを設けなかったのは、初歩的で致命的なミスである。藤田さんと受講者に申し訳なく思うばかりである。

1月3日付け朝日新聞地域面の特集記事「Uターン Iターン MYターン」の初回で、藤田さんが紹介された。先述の他にも、山との出会いと山への変わらぬ思い、転職・移住による生活の変化、ガイド仕事の厳しい経済事情などが記されている。また「50歳を過ぎた頃、かねて夢見ていた登山ガイドに転職したいという思いが強くなった。相次ぐ山岳事故の報道に接し、『安全な登山のために力を尽くしたい』と考えた」という、転職決意の理由も目を引く。50歳を過ぎてからの転職。これはずいぶん勇気がいることである。しかし藤田さんには、勇気を奮い立たせる山への情熱がある。残された時間は長くはないという年齢と体力への焦燥が、その情熱に拍車をかける。そこに奥様の「思った通りの道を」との大らかな理解が注がれる。こうして藤田さんは登山ガイドの道に足を踏み入れたと、記事は伝えている。

人生は一度きり。転職のような大きな変化ではなくとも、日常の活動の中で後悔のない選択をし、納得のいく生き方をしたいものである。藤田さんに学ぶことは多い。

新会員紹介

山と私

向山　紀子

一昨年、本格的に登山デビューし、三年が経ちました。そして一昨年始めた山梨百名山ですが、２０２４年19日、農鳥岳を百座目にして無事完登しました。

昨年の６月は、山梨百名山の四天王である笛ヶ岳に挑戦しました。笛ヶ岳は、朝４時に登山を開始し、13時間、21キロメートルの日帰り、超ロングトレイルでした。渡渉あり、急登ばかりの、過酷な行程でした。でも、この山梨百名山を制覇できたのは、一緒に登山をしてくれた山友さんたちのおかげです。辛いとき励ましてくれ、一緒に登ってくれた山友さんに、心から感謝したいと思います。

登山の一番の楽しさは、人との交流、自然の素晴らしさを共有できることだと思います。そして、私の次の野望は、登山ガイドになること。一人じゃ登れないけど、誰かがいれば登れる。そんな人の役に立ちたい。多くの方に山歩きを思いっきり愉しんでもらいたい。そんな思いで、新たな目標に向かって突き進んでみようと思います。

これから山岳会の皆さんと山行を楽しみながら、勉強させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

山との出会い、人との出会い

小池　雄一郎

初めて山に登ったのは50歳からです。当時の飲み仲間から、いい汗かこうと誘われたのがきっかけです。当時新潟に単身赴任で勤務しており、挑んだ山は弥彦山６３４ｍでした。社会人になった後はろくに運動もせず、当然脚は悲鳴を上げてようやく下山しました。

それから、新潟県内中心に低山を登り、その度に山それぞれのコースを辿り、山それぞれの絶景を楽しみました。山仲間が増え、暇だらけの週末が魅力ある日々に変貌しました。その後、北海道の釧路に転勤となり、大自然の中で本格的に登り始めました。ヒグマが出没する北海道でもあり、地元の山の会に入会し、新たな仲間とともに、名峰のみならず地元人しか登らない藪漕ぎコースまで登りました。昨年４月に単身赴任を終え、山梨に戻りました。さっそく新たな出会いを求めて、山梨支部に

連絡し入会致しました。
技術習得はもちろん公募山行など、様々な活動を拝見し、好奇心は高まる一方でした。
登山は山の魅力もありますが、仲間との交流が一番の魅力と感じております。これからも、登山のみならず、山の歴史・文化に至るまで、学びたいと考えております。皆様のご指導を今後とも宜しくお願い申し上げます。

山を生きる

猪俣　健之介

当時21歳の私。タバコとお酒が大好きで、山というものに一切興味はなかった。阿佐田哲也さんの麻雀小説や村上春樹さんの別世界に浸りながら、働いては飲み歩く毎日だった。
機転は、何気なく手に取った植村直己さんの「青春を山に賭けて」だった。程なくして右手のたばこはピッケルになり、左手の小説はカメラに変わった。やがて縁が縁を呼び、富士山や北岳での山小屋管理が本職となり、県岳連の南嶺会で教わった登山技術は救助技術として大活躍した。まさに青春を山に賭けた「山小屋」は令和２年のコロナ過を機に引退したが、その後は、山の経験を活かしながらガイドをしつつ、絶滅危惧種を主とした高山植物調査を続けながら、市役所勤めをしている。
この度縁があって当会に入会させていただき、50歳を過ぎてなお素敵な山仲間に出逢える環境をいただけたことについて、この場をお借りして深く感謝をお伝えしたい。これまでの遭難救助や登山の経験、失敗談を伝える立ち位置を認識しながらも、当会で自身が技術のみならず、岳人として成長していけたらと思う。

出会い

村田　幸子

坊ヶ峰の麓で生まれ育った。盆地を取り巻く山々を眺めていたが、登ってみたいと思ったことはなかった。
大人になり、甲斐市山の日イベントで、ふるさと自然観察路（昇仙峡）へ親子で参加した。白砂山の美しさに驚いた。それから山への興味が湧いてきた。すると、ただ見ていただけの山々が輝いて見えるようになった。
知識はないが一人でも登れるかな、と思ってレンゲツツジの時期に行った甘利山のグリーンロッジで登山基礎

講座のチラシを手にし、受講した。その後、山行のお誘いで初めて雪山へも参加した。青と白の静かな世界に感動した。数ヶ月前の自分では無理だと思っていたが、山岳会の皆さんの温かいご指導のおかげだ。

まだ知らない素晴らしい景色が沢山あると思うと心が躍る。山を愛する方々との出会いに感謝している。

事務局報告

●理事会・総会など（議題ほか）

令和６年（２０２４年）

4月22日　理事会（定時総会議案、総会終了後の役員選任についての臨時理事会・深田祭、田部祭、前期公募山行・支部山行計画と実績、やまなし登山基礎講座開催要項）

4月22日　定時総会（令和５年度事業報告・決算、令和６年度事業計画・予算、新年度役員改選案ほか）

5月8日　理事会（第10回やまなし登山基礎講座、支部山行実績・予定、支部通信16号発行、第５回子どもと登山、新入支部員対象の登山届説明会、山岳祭の冊子発行、役員・委員会の分掌確認、山岳古道調査など）

6月12日　理事会（新入支部員対象登山届説明会・意見交換会、支部通信16号発行、第５回子どもと登山、第10回やまなし登山基礎講座、支部山行・レインジャー山行の予定・実績、山岳古道会議報告など）

6月25日・26日　新入支部員登山届説明会・意見交換会（登山届フローチャート説明ほか）

7月10日　理事会（第５回子どもと登山、第10回やまなし登山基礎講座、木暮祭、中部ブロック交流会、中期

山行計画など）
8月19日　理事会（第10回やまなし登山基礎講座、木暮祭と記念山行、山岳祭記念切手、中部ブロック交流会など）
9月11日　理事会（第10回やまなし登山基礎講座、木暮祭、中部ブロック交流会、支部山行・個人山行予定と実績など）
10月8日　理事会（第10回やまなし登山基礎講座、木暮祭、中期公募山行・支部山行、中部ブロック交流会、第17号甲斐山岳発行、忘年会・新年会など）
11月13日　理事会（第10回やまなし登山基礎講座分析、木暮祭総括、第11回中部ブロック交流会最終確認など）
11月21日　山行委員会（最近の支部活動、山行の仕分け区分、令和7年度支部山行計画立案）
12月11日　理事会（令和7年度事業計画案・予算案、令和6年度後期山行、令和7年度山行計画案、やまなし登山基礎講座の代替案など）
令和7年（2025年）
1月8日　理事会（後期公募・支部山行計画の実績、甲斐山岳16号発行、令和7年支部事業計画・予算案の策定・決定、新年会など）
2月12日　理事会（後期公募・支部山行の実績・計画、令和7年度事業計画・山行計画・講習会案、令和6年度事業報告・決算の準備、甲斐山岳16号発行の進捗、定時総会・懇親会案、新年度の役員・委員会の人事案）
3月12日　理事会（令和6年度事業報告・決算、令和7年度支部山行詳細案、定時総会議案・役員・委員会人事案）

●支部行事など
※支部山行：支部員対象登山、公募山行：公募による登山
令和6年（2024年）
4月6日　公募山行（蜂城山、笛吹市）10名参加
4月21日　公募山行（茅ヶ岳、韮崎市・北杜市・甲斐市）12名参加。第43回深田祭参列
4月27日　公募山行（霧訪山、塩尻市）6名参加、
4月29日　第7回田部祭参列　15名参列。公募山行（西沢渓谷、山梨市）15名参加
5月5日　公募山行（富士山五合目、小山町）13名参加
5月5～6日　公募山行（蝶ヶ岳、松本市）8名参加
5月12日　公募山行（クライミング講習会①、三ツ峠）5名参加

5月18日　公募山行（クライミング講習会②、小川山）
　9名参加
6月1日　公募山行（ロープワークとレスキュー技術講習、甲府市）15名参加
6月8日　公募山行（笠無、北杜市）9名参加、
6月16日～17日　公募山行（三ツ峠、西桂町）10名参加
7月5日～7日　公募山行（笠ヶ岳、高山市）6名参加
7月20日～21日　公募山行（乗鞍岳、松本市）10名参加
7月26日～27日　支部山行（焼岳、松本市）5名参加
8月10日　第5回子どもと登山（飯盛山・南牧村）42名参加
8月18日　公募山行（男山・天狗山、川上村・南相木村村）4名参加
9月7日　支部山行（富士山奥庭、鳴沢村）6名参加
9月12日・19日・26日・28日・10月3日・5日・9日　第10回やまなし登山基礎講座（甲府総合市民会館・茅ヶ岳山麓・高川山）受講者10名
10月12日～13日　公募山行（鳳凰山、南アルプス市・韮崎市）6名参加
10月19日～20日　第65回木暮祭（金山・北杜市）70名参加、木暮祭記念登山（磨子、北杜市）25名参加
10月26日　公募山行（奈良倉山、大月市・小菅村）10名参加
10月27日　公募山行（御座山、南相木村・北相木村）8名参加
11月4日　公募山行（源氏山、富士川町）6名参加
11月16日～17日　第11回中部ブロック4支部交流会（清泉寮・美し森周辺、北杜市）42名参加
11月24日　支部山行（丹波天平、丹波山村）4名参加
12月1日　公募山行（興因寺山、甲府市）6名参加
令和7年（２０２５年）
1月11日　公募山行（浜石岳、静岡市）13名参加
2月2日　支部山行（宝登山、長瀞町）4人参加
1月17日・2月1日・9日　公募山行（雪山入門ステップアップ講習①、北横岳、茅野市）合計12名参加
2月8日・3月2日・5日　公募山行（雪山入門ステップアップ講習②、縞枯山・茶臼岳・麦草峠、茅野市）合計12名参加
3月22～23日　公募山行（雪山入門ステップアップ講習③、根石岳・東天狗岳・硫黄岳、茅野市）合計10名参加

3月1日～2日　公募山行（富士山雪上訓練、富士吉田市）6名参加
3月30日　公募山行（御嶽古道、甲斐市）
●山梨県山岳レインジャー活動
令和6年（2024年）
4月29日　西沢渓谷（探索調査）古屋・遠藤・荻野・黒沼・平松・岩間・手崎・石澤・磯野、クモイコザクラ・コチャメルソウ・ヒメスギラン・オオクボシダ
6月5日　鳳凰山（定経路②調査）古屋・上田、カモメラン・イチョウラン
6月16日　三ツ峠（探索調査）遠藤・黒沼・平松・手崎・石澤・磯野、アツモリソウ・キバナノアツモリソウ・カモメラン・ムヨウラン
6月21日　鳳凰山（定経路②調査）古屋・中田、カモメラン・イチョウラン
7月8～9日　鳳凰山（定経路①調査）古屋・上田、カモメラン・イチョウラン
7月20～21日　北岳（定経路②）古屋・手崎・上田、タカネマンテマ・ミヤマハナシノブ
●機関誌等発行
令和6年（2024年）
6月30日　会報「支部通信」第3期第16号
12月15日　会報「支部通信」第3期17号
令和7年（2025年）
3月31日　機関誌『甲斐山岳』第16号
●会員異動
入会
会員番号17241　相川　修（準会員から移行）
会員番号17284　向山　紀子
会員番号17303　小池　雄一郎
会員番号17326　猪俣　健之介
会員番号A0608　清水　真理
会員番号A0629　村田　幸子
退会
会員番号2525　中尾　正武（令和7年1月死亡）
会員番号13816　鈴木　伸介（令和7年3月末日）
会員番号A0528　近藤　美奈子（同右）
会員番号A0608　清水　真理（同右）

日本山岳会山梨支部・会員名簿

（2025.3.31 現在・79 名　会員番号順 ＊印は永年会員）

会員番号	氏 名
5350	浅川 瑞穂＊
5657	清水 日出勇＊
7299	許山 隆＊
7728	久保田 明宗＊
7730	内藤 順造＊
7831	堀口 丈夫＊
8064	望月 阿香実
8145	梅本 実
8334	小林 啓助
9089	荻原 賢司
9336	羽田 政人
9634	滑志田 隆
10920	深沢 健三
11028	薬袋 興児
11326	斎藤 英子
11350	足立 英二
11352	小宮山 稔
11408	斎藤 忠文
11518	所 一路
11652	角田 元
11823	秋山 泉
12069	長沢 洋
12111	中田 一郎
12213	鈴木 勝彦
12396	遠山 若枝
12561	古屋 寿隆
12569	磯野 澄也
12913	青木 茂
13443	中村 光吉
13669	矢崎 茂男
13816	鈴木 伸介
14065	北原 孝浩
14263	平松 久美夫
14440	露木 弘光
14653	萩野 有基子
14785	小杉 秀夫
14821	大澤 純二
14827	野口 健介
15517	堀内 久光
15569	渡辺 峯雄
15720	小宮山 千彰
15833	末木 佐登子
15958	大澤 さな枝
16140	長坂 公貴
16210	池田 新二郎
16268	臼田 昌美
16290	荏原 由美子
16499	窪田 光一
16691	小嶋 数文
16693	河野 芳尚
16730	中川 惠美子
16786	平松 清子
16815	高本 英明
17000	服部 俊樹
17044	黒沼 英美
17059	上田 謙治
17077	高橋 みゆき
17099	望月 啓治
17110	遠藤 辰也
17204	東条 真百合
17241	相川 修
17284	向山 紀子
17303	小池 雄一郎
17326	猪俣 健之介

以上 正会員 64 名

A0404	井田 智子
A0405	小川 基子
A0438	手崎 喜美子
A0449	石澤 貴子
A0493	鶴田 陽子
A0505	岩間 明子
A0506	荻野 重行
A0514	日向 直子
A0515	鈴木 大介
A0516	飯島 典子
A0528	近藤 美奈子
A0549	渡辺 和美
A0582	中田 雅弘
A0608	清水 真理
A0629	村田 幸子

以上 準会員 15 名

４年間支部を牽引された北原孝浩支部長が退任し、古屋寿隆事務局長が新支部長に就任。支部にとって節目の一年だった。大きな行事が重なったが、支部長を中心に支部員が結束して、すべて成功裏に終えることに胸を張りたい。創立１２０年を迎える２０２５年度も、支部員個々が力を出し合い活動を推進してまいりたい。

今年度も、本部・中部ブロック各支部・その他の関係団体にご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

編集担当　矢﨑　茂男

題　　字　高室陽二郎
表紙・挿絵　遠山　若枝

甲斐山岳　第十六号

令和七年三月三十一日発行
発　行　公益社団法人日本山岳会山梨支部
発行者　古屋　寿隆
編　集　矢﨑　茂男
支部事務局
〒四〇〇－〇一一八
甲斐市竜王三〇二二－一　古屋寿隆方